

川柳塔

昭和四十五年四月二十五日 印刷
昭和四十五年五月一日発行 (毎月一日発行)
(第五十六号)



No. 56

特集・男の句

五月号

黒潮おどる

紀州路へ



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに5号…(毎日)…12時51分発

急行 きのくに10号…(毎日)…16時40分発

急行 きのくに6号…(土曜)…19時13分発

＜白浜・新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発

急行 直通列車…(毎日)…22時15分発

●きのくに5号は、阪和線に接する一駅の列車
は連絡列車を1時間前から発着いたします

南海電鉄・南海交通
(641) 6600 (641) 5033

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

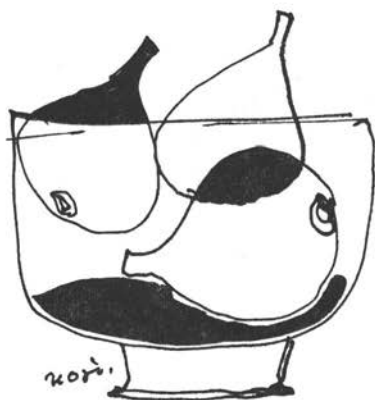
なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

芸 腹

先日「よみうり寸評」にボデー、ランゲ
ージの事が書いてあった。政治家やヤクザの
親分は目くばせ一つで乾分を動かす無言のゼ
スチュア、日本では腹芸と言われるあれであ
る。話し相手の目を普通より長くみつめる場
合、アメリカ人なら特別の愛情や親しみを意
味するが、イギリス人なら習慣だから格別の
ことはない。又アメリカ人が鼻をこするのは
内心不同意か不満を表わすというのである。
私達が十七文字をならべる際でも、こうし
た、言外の言とか、間とか、リズムとかいう

要素は是非必要で、句の中からウインクして
いる目のささやきを読みとる事も肝要である
し、作句する方もウインクらしくないウイン
クでささやきかけるのが大切である。それに
は相当修練が必要である。修練も必要だが作
者の「人間陶冶」というのが根本問題で、気
どった文字の羅列、誰れかの言葉の模倣等は
読む人をほんとうに感銘させる「いのちある
句」には程遠く、むしろ大変な邪道であるに
過ぎない。

良心のかけらがあって伏し目がち
裏切られた票をぶざまに読みなおし
しこり残すまいとは勝ってからのこと
完敗もここまで来ればリズムミカル
飯島氏を悼む
春寒しきびしく薫るお人柄



庵々生島中

川柳塔五月号目次

座右の句

寝る前の煙草は何を思えとか

(葭乃)

私の句

削られてゆく山肌に残る萩

若柳潮花

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

腹芸

中島生々庵選 (1)

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

初恋談義

西尾葉選 (2)

川柳初篇研究 (八十三)

西尾葉選 (20)

前田喜代人・岡崎重義・清川端柳風・故高須重三味・丸

博美・藤井和雄・十府・岡田甫

活版印刷事始め (大陸巷談)

東野大八選 (22)

近作柳樽

北川春巢選 (30)

秀句鑑賞 (近作柳樽)

若本多久志選 (28)

古京の芝草

阿万万的選 (29)

九輪抄

清水白柳選 (40)

初恋談義

西尾葉

初恋の告白は酒の席でも、またバーの隅でも、よくきいたことがあるが、余程上手にやらないと歯のうくような、のろけ話になって鼻もちならない仕儀になる。それに初恋の話には、相当粉飾されたことが多くて、どこかの小説か、映画でみたことのあるような話の多いのは、けだし初恋は破れる、成就しない為に自らの慰めとして、また綺麗な思い出として、何回も話している中にいつのまにか、小説の主人公になり、映画のヒーローとなった初恋が多いと思うのだ。

自分の初恋はどうだときかれたら、満五才の幼稚園の時に机を並べていた目の細い細い女の子に思いをよせて、千代紙をやったり、はじき玉を買いだりしたことが、初恋のはしりだったのじゃなかったらうか。勿論帰りは、手をつないで、家まで送って行ったことも思い出される。ナニッその時の癖が今も癒らず、ホステスをマンションまで送って行くのが常習となったのと違うかと、言われるが、昔の諺に三つ子の癖は百迄もとは、けだし言うてあると感心している次第。

川柳徳川記：(十四)
同人特集「男の句」

山川阿茶・三井醉夢・池田あや子

近詠

諸家

独り酒

高鷲亜鈍

豆秋をおもう

吉田水車

川柳のたわ言

古川鶴声

土地カンの句

浅野芳朗

初歩教室

本田恵二朗

きのうきよう

本多柳志

雅号ぶっちゃけばなし

舟木与根一

大萬川柳「急行」

清水白柳選

柳界展望

(薫風)

本社四月句会

(庸佑)

一路集

(文秋)

「横道」

藤井明朗選

「メモ」

高橋操子選

「男」

田垣方大選

編集後記

(二三夫)

座右の句

その日暮らしも軒に雀がこぼるるよ

(路郎)

私の句

一家団楽の後 芝生に新聞紙など

大坂形水

五才の時の初恋だけでは、オナニーにもならないので、せめて十才以上と想着て考えてみるとあった。十三才の時に……考えて出てくるような初恋じゃあんまり大したことではないけれど、今から思うと当時は相当真剣だった。それは五才上の姉の友達であって、名は綾子というた。どうだ良い名前だろう。なんだか紫の君という感じのする娘さ。姉のところへその娘が遊びに来ると、僕はどこへも遊びに出ず、二階へ上がれば二階、縁側へ腰をかければ縁側と、つきまとうていたものだ。

或日姉達は、えらい剣幕で『ウチラの側にばっかり、へばりついていないで、外へ遊びに行っておいで』ときつい叱りようだったので、残念ながら、しぶしぶその場をはなれたが、今から思うと、どうやらこれから、アンネの話でもするつもりだったのだらうと思う。そうでないとなんかに叱る筈がないものな。それから二十二才の時に、もうこれは初恋じゃない。つまり初恋とはプラトニックなもので、時には片思いと、年上の人に憧れた、はかない、やるせない、又楽しい思い出というものらしい。長くのびた少女の髪の毛の匂いと、その手触りにブルブルツときた。トキメキのあの頃がもう一度来ないのが残念だ。初恋の思い出はがゆいことばかり
初恋の人に似てるとくどきだし

栗 栗



中島生々庵選

大阪市 福井野迷路

情報が考える人の邪魔をする

おいしいことしたことが残る夢

やるのがダブルプレイの日なりけり

赤は赤でも白い地にまん丸く

死と地球どちら重いか考える

大阪市 正本水客

盆地冬眠 氷の湖を底にして

しみこんできた寒さがたまって音だ

陽の光りを押しやるように風渡る

うどん好き蕎麦ずき夫婦旅にいる

盛りのうちに散る花になりたくて

高槻市 傍島静馬

断絶時代養老院は花ざかり

ホトケさんになるまで偉さわからない

癩症のおやじの茶碗ばかり欠け

寝つかれぬ夜はそこらが痒うなり

隙のないええ恰好で持っけいず

大阪市 本多柳志

香典も千円ですむ人が死に

任されて視野のせまさをさとられ

直木賞モデルは謎のままでよし

ペンネームもって家業を継ぐ気なし

旅中吟

急行通過牛が鳴いてる二番線

大阪市 大坂形水

企画部も情報過剰に戸惑えり

カルメラに似た経済の膨れよう

ルンペンの服からヒント得たモード

連休の一日がらくた片付ける

万博で本場のコーヒ飲んでみる

京都府 大 鶴 喜 由

お色気も語れず老いの無口かな

幸せにする自信なく女を捨てる

談笑をしても資のワク労のワク

喜びの極致と云うが泣く姿

これしきのコマーシャルにも美女を添え

青森市 工 藤 甲 吉

七人の敵もなくなる定年期

むき出しは平で猫かぶりは課長

世界二位の国で乞食が死んでいた

そこら辺掃くが如くにパンタロン

恥ずかしいけどそのときは燃えました

大阪市 金 井 文 秋

妻病む(続)

「勝つんやで」ふるえる妻の手を握り

蛇口しめるようには病氣止められず

点滴が命の水と見ゆる日よ

母の死二月二十七日仏滅

旅立ちには仏滅でよし弥陀の国

天寿得た姿は眠る如くなり

大阪市 山 川 阿 茶

アットおどろく程の脱税してみたし

文字と云うかくれ蓑きてもの申す

土地ブーム瞞される金も欲もなし

金貯めるつもりになった下り阪

巢を張ってママさん女郎蜘蛛のよう

出雲市 尼 緑 之 助

ああ今日は寝だめする日か又眠り

益田市、万福寺、医光寺にて

雪舟の庭 八百年の苔の色

古刹寂として鯉の遊ぶ池

襖絵の黒さ戦火も耐えて来た

幡龍湖

屈曲の水はしずかに幡竜湖

神戸市 仲 どんたく

万博をカメラのアイで眺めて来

ほんとうの顔で伝票繰るマダム

吹き溜りのように深夜のラーメン屋

坪百万だから鏡で倍に見せ

哀愁の台詞で葬儀屋相つとめ

岡山県

浜田久米雄

よく似てる石を見つけた桂浜

年金へ胸算用をして出かけ

郵便が素通りをした阿呆らしさ

暗算にならずそろばん玉を出し

日めくりのはや巡り来る四月馬鹿

豊中市

戸田古方

植物の素直に伸びて天近し

愛のうた天女が歌詞を忘れかけ

不毛を撫でるただ白い霧赤い霧

色手本と違うた赤に染め上り

制服の処女それなりにある個性

倉敷市

本田恵二朗

手綱とる妻あり安心感があり

老妻と受話器とり合う孫の声

婆ちゃんの財布うれしくねらわれる

無口だが好漢笑顔を惜しまない

老婆心前口上が長くなり

岡山県

直原七面山

酒に夫を連れ行かれ

笑ってみてもひとりぼっち

よっこらさあで担ぎ上ぐ棺

故人の言葉を借りて叱責

うどん一杯ですます逢曳

竹原市

小島蘭幸

追いつめられても今頃夢を見ず

パチンコへ行けば必らずいる男

ひとりぼっちになって執念らしきもの

最初からちょっと待たせてみるデート

下関市

石川侃流洞

叱られに行く入口の重いドア

馬耳東風妻のプランへ金がない

奥の手でどうにか勝って来た空虚

安全を信じて夜汽車みんな寝る

大阪市

中川滋雀

霊柩車辻を曲れば急ぎ出し

奢られた借りが荷になる帰り道

ふり向いてみても足音だけの僕

雨止んでしもたが意地の迎え傘

大阪市

有信新之助

一年分まとめて晴着を着て疲れ

スピードを出すなときれいな道ができ

エコノミーアニマル吐きだす朝の駅

地下街で流行だけを仕入れてき

大阪市 木村水洞

当選して公約が邪魔になり

言論の自由がすぎて長屋もめ

市営平田渡船場閉鎖

船からはこれが最後の川景色

伊勢別宮滝原宮

駅で聞き里でも聞いて神詣

京都市 都倉求芽

音たてて出世コースを走る奴

特急がタタタタタタタ春の風

押入れを四五年塞いでからほられ

万博開会式

なびく風みな一つなり万国旗

松江市 吉岡通児

振って出る運なら賽に頼りもし

頭からうたがってみるいい話

しょことなしの茶漬けも妻の留守

灸の壺やわ肌白きど真ん中

しこりの取れた頃に改選

苦労したことが威張れた二昔

完全退職

花つける盆栽ほどの夢に生き

瓢箪を浮かした型で行きましよう

島根県 堀江正朗

春風が義眼忘れた目にしみる

飴しゃぶりながらいい事ないかない

足で見 見えぬ草履を手でみつ

妻の目へ一つこぼれたご飯粒

岡山県 荻野鮫虎狼

弱点をじんわり突かれたコップ酒

雨の日の遍路は何か物思う

初孫の来る日財布を確かめる

人間を使う機械の掃除する

竹原市 森井菁居

花びらの散る順番を雨が変え

伝説を削るブルドーザーの爪

日めくりの早さを倅せとも思

二女「紀」生まる

安産をねぎらう春の雨つつく

大阪市 酒田清子

主治医今日心の中もお見通し
義憤抵抗せまい心にひしめいて

病室は季節無視した花が咲く
ファッションが神代に還えるパンタロン

今治市 越智一水

まな板のリズムもくるう物価高

トイレットペーパーで靴もふいておき

女傘男がさせば平和なり

団体さん飲み食いしゃべって寝てしまい

倉敷市 水粉千翁

わたくしを叱る余裕を取戻し

まっ直ぐに向いて妥協を選ばない

しのび足でも偽れぬ春の音

たそがれて男涙をもてあまし

八尾市 高杉鬼遊

見場の二人に駒が動かされ

化粧した女とペテン師の会話

スモッグの下で阿呆のお祭りだ

長男大阪市大合格

合格に手を取り他人が泣いてくれ

出雲市 王紫

還らぬと知れども女待ち続け

犬の幸せ唯盲従を心がけ

生きているうちに使えと云う至言

心臓がも一つ欲しい生きる欲

松江市 中川晃男

吹雪する窓の中なる熱帯魚

ダイヤルがふるえる指に廻る恋

合槌が途中で切れる手内職

相談に乗る子になった面構え

倉敷市 小幡里風

後から妻が押してるとは知らず

核心へじんわり寄っている対話

おみくじが予感の裏目に出て迷い

覚悟して置けとは負けた方が云い

倉敷市 小野克枝

さいころに任す夫婦の泣き笑い

金では買えぬものを失いそうになり

この枝を切れば助かる花がある

確かめてからが孤独の道となり

鳥取県 清水 一保

孫よりも先を歩いてハイキング

喧嘩する暇も無いねと笑い合い

伊丹市 小川 静観 堂

七〇年妻もでっかい夢を抱き

百円の価値を駄々っ子知って居り

町議三選して

一票の重さが肩に沁む佳き日

笠岡市 木山 遠二

愛猫マリ十八年の生涯を閉ず

老夫婦の間の猫の席が空き

炬燵から見えるところへ埋めてやり

猫の死へ隣も悔み云いに来る

縁の残る足跡だけが形見なり

高槻市 若柳 潮花

すぐ替える趣味へくらしの金を注ぎ

叱られる覚悟が出来てノックする

楽屋風呂男ひとりへ湯があふれ

羽子抱いた禿が新春の文づかい

奈良県 石倉 旅風

荒廃の寺の哀しや美しや

名を呼べば近づくごとし奈良の山

奈良と書く差出人となりにけり

枕そろえて万博の友を待つ

僕に心臓二つありよく盗られ

駅弁がやっとなら買えたり動き出し

郷里を訊けば沖繩県と眉を上げ

下関市 桜川 不水

どんじりが一人はみ出て草を摘み

満開に白く暮れゆく梅の道

蜘蛛と蜂巻き手突き手の果し合い

大きなこと言うてて止めの風邪をひき

門真市 福島 鉄児

大阪駅に北国の雪西下する

云う事が云える若さを不安とも

顔見ればやっぱり叱る気になれず

手土産が要るので足が遠ざかり

平田市 久家代 仕男

おんな連れ内しょ話の楽しそう

ふだん着が衣桁に佗し妻の留守

ルンペンも女としての身だしなみ

休耕で過疎のテンポをまた早め

熊本県 有働芳仙

病診車無気味なムード漂わせ
共稼ぎ空巢のねらう物は無し
ポットの湯のようにいずれはさめる恋
空想の中で笑ってみる孤独

岸和田市 葛城伊三郎

振り向いた顔へ叩いた肩を詫び
下戸と来て桜を拙づく見てまわり
あの時の一言すまぬが云えぬまま
霜やけをかくして母の肩を揉み

堺市 吉田圭井堂

ポンコツにされて盗難車返って来
仲人が大物過ぎて捗らず
身の非力言わず家相がどうのこの
足萎えに手を貸してやる交差点

枚方市 宮川珠笑

子の病んで妻の鏡の曇る日び
心とは違うイヤリングの揺れよ
腹立ちへ雲吸い込まん深呼吸
内職へ主婦かりたてて日脚伸び

岡山県 浜野奇童

妻入院（三句）

入院を辺地の受話器の底で聞く
力一杯笑顔を見せているベッド
退院の妻を待っている埃

卒業式

本当にみんな出て行く卒業日

鳥取県 森田布堂

人間のもろさ寒さにしてやられ
さうならこだまとなって跳ねかえり
蜜もろた蜂約束の実をならせ
貯めてから産む気ですかとひやかされ

倉敷市 臼井三林坊

絶対反対その絶対を捨て給え
五十年肝胆照す友もなく
命がけの恋だ拍手をしてやろう
出不精が出る日俄かにくもり出し

京都市 松川杜的

巡拝の動機運ちゃんにただされる

飛鳥路にて

残雪を払うて二面石確かめる

飛鳥寺にて

左右から拝して厳しさやわらかさ

播州室津観梅

たこ焼が匂うて梅には早い部落さとし

大阪市 西 森 花 村

おやすみと月に家までおくられる

歩道橋顔から先に登って来

満天の夕焼け万博包みこみ

前向きの姿勢そちらは墓場だよ

広島県 岩 谷 二 三 枝

メタンガスの泥の如くに愚痴が煮え

ある傾斜男捨て身に構えたり

きつ先を避けてる何気ない微笑

直行は出来ない蚯蚓のノルマです

鹿児島市 土 岐 ト ク 子

辛うじてイエスの声に支えられ

夢入れたあとのせまの二DK

目を細めそれでも老妻のヤンチャ振り

大阪市 西 出 一 栄

天と地がくつつきそうに気がつまる

付添いが先生の言いつけ守りすぎ

雪や雪やと云う間に止んだ春の雪

富田林市 岩 田 美 代

見せるものあって人を招びたがり

別々の事考えて夜にいる

無念無想お金の音で破られる

大阪市 児 島 与 呂 志

カメラ意識してる女のはじらい

声の美しさで女男をさける

落ち付けば女あどけなく旅づかれ

和歌山市 土 谷 城 石

何となく灰に字を書く暇つぶし

落書もされて人気が出るスター

助太刀の陰に美人の泣くドラマ

島根県 小 砂 白 汀

ソプラノの姿勢が得意黄水仙

寒月の足跡樹氷として残し

羽蟻の屍のりこえ発つごとし

奈良県 草 深 醉 升

インドアを廻りゴルフもやっています

待たされたお陰で事故に遭わずすみ

お水とり雪も名残りのうす化粧

大阪市 今 西 章 雅

義理を欠くようだが聞かぬ事とする
懐と相談決まりあきらめる

ホステスが次々屋のおんな風呂

兵庫県 大江 秋月

夫婦して旅の土産を撰る平和

一人乗り一人降りしてローカル線

押し売りもあきらめて出る暮らし向き

藤井寺市 西 いわを

親切をその場かぎりで忘れとき

真実を言えない程の真剣さ

余生^{退院に思う}まだ遥かな雲の如うごく

米子市 林 瑞枝

愛称で呼ばれ職場の楽しくて

もう過去の病室今宵も灯がともし

働いて母は少女の瞳にかえり

美禰市 安平 次弘道

カギっ子を残し広場は夕焼ける

奥さんの無駄を知ってる清掃車

浮気とは知らず女の一途なり

大阪市 宮尾 あいき

木の芽抱く朝の日ざしも春の色

女性上位男雛の鼻かけている
長男とまちがえられた電話口

松原市 谷垣 史好

ご詠歌に似てくる祖母の子守唄

しんどいしんどいと商売抜けてる

折も折身代り^{メニエル氏病と診断}みたいに小鳥死に

下関市 国弘 半休門

小休止土産買わせるお茶を出し

反抗期だからと黙放っておき

育児法段々荒らく子を叱り

大阪市 天正 千梢

老いのわびしさ仮面すてきれず

思い返えしあともどりする小商

もつれがちな足で難路を登りきり

岡山市 田村 藤波

感無量万国博のマスゲーム

万国の平和と進歩は日本から

世界の瞳万博へ日本へ大阪へ

松江市 小林 孤呂二

宮鳩はだれかを待っている歩み

断層へ明治は黙す日の多き

ほんとうの笑いではない妓の笑い

和歌山市 西尾 公作

家計簿に実家の助太刀まだ消えず

落書に育ちの高さ壁に延び

白鳥の水尾が寄り合い春にする

東大阪市 竹中 肖二

失職はしたが自信のある微笑

気休めの生垣低く低く植え

温床のイチゴどこやら欠けた味

岡山県 大森 娛句楽

飲む程に喉の掃除も出来た声

つき飲みの両手へ満足そうな笑み

日曜の隣を誘うにも電話

高槻市 福田 丁路

妻も子もあるを承知の上の恋

逝く春をホルモン焼で酔いつぶれ

商魂は性教育に名を借りて

小松市 馬場 魚山

這い這いが出来て食事を困らせる

結婚をくり返す度び芸が肥え

コンピュータ血もなく涙もない答え

倉敷市 木村 千容

殷懃無礼歩を突きつけて悦に入り
春を呼ぶ第一声は予報官
すべりどめ捨てて覚悟で払わされ

笠岡市 出原 真奇

母の死

最後の不幸亡母に火をつける

春の風やととセーターあみあがり

カマキリのパパが力んだ力こぶ

兵庫県 河原 みのる

老病今おとなしくなつて先が知れ

アレもコレも国庫でせいと脱税し

はっとけば家もここまで住めるもの

兵庫県 遠山 可住

合格のよろこびパーマかけながら

ええ人やなあ汗かいて笑ってる

女？男？女？やっぱり女なり

竹原市 山内 静水

幸福いっぱい嫁さんもんでくれ

テレビ見ながら乾大根を刻む妻

日勘定する定年へ日日新

広島県 高橋 鬼焼

ぐちとして聞くから笑顔くずれかけ

ずるずると女の畏へ酔うてゆき
聞きかえす言葉も春の風にのり

松江市

岡崎祥月

太陽と背中合わせの深呼吸

酒のまぬ俺をネオンが呼んでいる

青空へ背伸びひよろひよろ長い影

守口市

羽原静歩

コケシもう所帯の裏を知りつくし

潮騒へ時の流れを聞いてみる

前進をすれば約手が顔を出し

倉敷市

野田素身郎

気まぐれにかけた電話を喜ばれ

貴方次第でいつでも開く気の蕾

同じとこばかり見ている待ち合わせ

大阪市

福井多蘭子

駅頭の旅ひっさげた紙袋

冬の山澄みきってホテル見え

看護婦の笑声聞え今日は晴

姫路市

隠岐不酔

花の流 芯切り枝切りたわまされ

苦勞性ですのと白髪負けおしみ

妻位いうまくだませと飲み仲間

芦屋市

丸川初甫

ハネムーンメッキのままで帰って来

おみくじを結ぶ梅にも祈り込め

じゃんけんで勝って声まで若返り

笠岡市

木山要次

雑談の中に気になる言葉尻

暗号の日誌が妻の疳に触れ

晩酌の美味しい訳を冷やかされ

米子市

八木千代

偶然がくれた出逢いを自惚れる

黙礼を送りたかぶり覗かせず

子を庇うとき世間へも眼をつむり

和歌山市

野村太茂津

人生の落葉にも似て騒ぐだけ

押しつけてこき使う気の名譽職

嘘の世をお伊勢様どう見そなわす

岡山県

出原敬一

星の降る夜を忘れし倦怠期

頼られて後を見送るだけの姉

金という餌へ花粉を蓄える

大阪市

島野大吉

拭き消してさよならだけの伝言板

寝付かれぬままに心臓の音がぞえ
昼弁当温め直す妻の味

笠岡市 松本忠三

女とは言わせておけば切りがない
電柱の陰で喪章を借り受ける
退職金幾ら位いと子がたずね

大阪市 川口弘生

俺達の子だ望むまい望むまい
何の役か知らず選挙に捲込まれ
不惑なぞウソわからないことばかり

倉吉市 奥谷弘朗

老妻と豆撒きをして笑い合い
お宅もですかと年頃を持つ同士
堂々と不信をなじる目がほしい

堺市 高橋千万子

晴れ姿まぶたに母は地図で追い
漬物をうっかりはめて包まれる
むき出しの見栄ひらひらと角曲る

桜井市 岩本雀踊子

とりとめた命をもおけ物と云う
幸福すぎても女不幸がり
過去がある故郷だから帰えない

岡山県 横山一声
たまに風邪引けばお医者にかからかわれ
後押しをしたに一度もふりむかず
借金すむまで我が家でない我が家

大阪府 西川誓二
ニンマリとあなた好みの甘え方
そそくさと遅れた朝の箸忙し

万国博開幕
世界中へ声高らかにこんにちわ

姫路市 村上春巳
七光り親父の偉さ見直す日
二月堂火がゆれ人の波がゆれ

万葉の道ぶっ飛ばす馬鹿がいる

善通寺市 岩田ひさお
銭湯も馴染みちゅうちよのない裸
放されて怪訝な犬の目と出合い

愛媛県 村上旭童
受験寝たらしく内職仕舞う音
なるようになる人生に生れつき

ふぐだけはたべぬお人でまだ達者
湯たんぽにまだ用がある春の雪

竹原市 時広一路

間が一つ遅れとうと言ひ出せず
目覚しがもう鳴るころよ覚めて待つ
踏まれても踏まれても砂固まらず

岡山市 川端 柳子

一本の白髪へ二三本殉死

ささやきは察しがついた片えくぼ
目で追うて心でやめるニューモード

大阪市 宮地 双楽

訥々の弁に真実みちあふれ

合格のあとは神様ふり向かず

古い地図ひろげウロチョロドライブ

大阪市 神谷 凡九郎

出合いつて楽し何やら残したい

五線紙へ喜怒哀楽の譜を入れる

本当の自分を消し去る粧いか

岡山市 池田 古心

取って欲しい手が動いてるに臆病な

気の焦り名案もなく酒あふる

虚脱した心に浸み入るすきま風

小松市 四方 天弘実

宗太郎忌句会

一周忌君の遺影も句座に入れ

合格をしたか隣家の笑い声

保険屋が厄年ですよと脅しに来

小松市 浅野 芳朗

パトカーの尻をノロノロスポートカー

若い歌手歌えば軍歌たよりなし

堺市 新谷 笑痴

チャネルは何処も万博逃げられず

君とならうまく行けそうとは若い

愛知県 大谷 月都

叱るまい自分も辿った途であり

雨なれば雨の別れを演出し

大阪市 河井 庸佑

卒業式

手を引かれ来た校門を今果立つ

「入学」

ランドセルかけて入学待ち切れず

倉敷市 藤井 春日

せめてものの情 辞任で首を切り

俗念へ鐘が鳴る鳴る修道院

大阪市 本庄 金三

野球拳女も少し酔うて居る

強風へ画面も揺れて居るテレビ

高石市

谷 沢 好 祐

まだ若さあるからミニへ眼が走り
説得という名で組合押しつける

和歌山市

垂 井 葵 水

とりどりのスカーフ春の雨が晴れ
溜息のように自動ドア閉まる

久留米市

永 松 道 雄

魂呼ぶ鐘の響の寺悲し

夢を笈い吾が人生はくれかかり

松江市

柳 楽 鶴 丸

大の字になって特攻隊教育受けた夢
世紀の怪物は他ならぬ人間だ

奈良市

宮 口 笛 生

命賭けて女許せるもの許し
愛着は蒸気機関車行く汽笛

高槻市

山 田 季 賛

お互に話せばわかると話合い
胃の痛みお医者さんでもわかるまい

大阪市

室 谷 鉄 舟

一本もつれず百足急いでる
病氣などして居れまっか娘の学資

八尾市

古 川 鶴 声

御神火の蔭に悩みの巫女一人

子の知らぬ双た親だけの記念の日

新居浜市

安 藤 桂 仙

宵越しの金に縁ない共稼ぎ

主題歌を覚えた頃にザーエンド

東大阪市

竹 中 綾 女

いつも数珠離さぬ人の愚痴を聞く
言い訳も三分ですむ赤電話

八尾市

香 川 酔 々

パチンコで儲け屋台へおく小銭

ホルモンのにおい日銭のもつ軽さ

堺市

伏 見 茂 美

妻の愚痴メロディで聞く台所

南紀道成寺にて

道成寺其処らにあるよな恋にする

和歌山市

増 田 次 章

小さな母がだんだん小さくなってゆく

出世した友をたずねている自分

自 選

島根県

藤 井 明 朗

よその話も父親は煙たがれ
春待ちきれず子等の草野球

収入の仕事となるとはかどらず

世界の春ひらひら万博の豪華

名古屋市

吉田水車

近頃の銭はチャリンとも言わず

早乙女の裳裾はミニの走りかも

退けてより急がぬ旅と言う心

芽のものの霜押しのけて押しのけて

大阪市

不二田一三夫

松江へ行った二歳の恋人をおもう

溝の隅ここがミミズの遊び場所

人間はだまし蝶をだませぬ 造花

寄席(二句)

出番表また新人の前に出る

漫才のきょうはママとしての顔

★

若本多久志

手相では女難が消えて居ぬ苦笑

電流を通うせどヒューズ切れた彼

見え透いた世辞にもなごむ気のゆるみ

老の髪染めながらふと自己嫌悪

石庭のしじまに老の幸を知り

菊沢小松園

男対女神様行きとどき

花卉むしられても雄蕊雌蕊の蔽とあり

石垣の割目へ不幸な生れつき

この夫婦何時まで続くと巫女おmoi

附いてゆく女もおんな昼ひなか

川村好郎

春雨へひとりでもよし花の寺

バスデーケーキ仏壇には花もない

テレビ見るのも多忙の中に入れ

腹癒せか中年夫婦も腕を組み

借りて来たことにして貸してやり

西尾 栞

急行の停らぬ駅の良い桜

サクラサクラ音痴の声は親ゆずり

艦隊の出動めきて鯉の列

デッキの二人最も派手にたたきあい

釣人を傘きてみてる出湯の橋

北川春巢

引伸したら意外な皺が見え

植木屋のお世辞に新居買わされる

借金が済まぬに保証人が死に

大先輩との論争は意地になり

深夜メーターのおかげ帰りが早くなり

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

黒梓の笑顔浄土へ行ったらし
甘ければまだチクロかと疑われ

名古屋市長谷川 鮮山

旧暦で明治生れは春を待ち
末っ子に頼る望みも背を向かれ
中卒の希望を容れる人不足
養子また地味で老舗の薄暗い

レジちらりちらりカッコウいい見合い
一年の伸び定年はほっとする
女房の方に信用あり借りる

岐阜市 市川 鱈 魚

本を見てかいた答がまた違い
窓口の裏にはふれぬ受け答え
道具だてほどにはゴルフ巧くなし

大洲市 米 沢 暁 明

農夫哀歌田植えなき田に咲くれんげ
合掌の母に世の中うるさすぎ
お医者はんだつかと板場手を洗い

今治市 長 野 文 庫

蒸しタオルで押えてるのに話しかけ
投げ出せば疲れた音の弁当箱

今治市 月 原 宵 明

機械ならわたしなんぞはスクラップ
握られて嬉しくもなし婦長の手
性別不明町に氾濫する平和

小松市 山 上 千 太 郎

山峡に老夫婦住む煙りたつ
心境の変化葬式二つ出し

和歌山市 秋 月 宏 方

青い空あるのにパチンコ屋へ吸われ
新観光カメラに媚びて俗化する
飲み歩くことを友情と感じが

銭湯で聞くおっさんの政治論

独 り 酒

高 鷲 亜 鈍

独り酒テレビに夢や妻の距離
大切にしようじゃないか眼に言葉

碌でなしの眼玉だったと閉す陰
鬼は外福は内表裏

助手席で骨砕いたり妻の事故
明るみへ口うごかして生きている

明るさのなかを人みなうごいてる
ゴーゴーも隣りの琴も嫁ぐまで

見守ってくれる友情忘れまじ
わかつてたくせに親不幸を詫びて泣く

いつかは知らぬ次の番はぼくらしい
ダービーの歓呼に踏きこえない

妻子までくどい酒から逃げられる
寝つくまで義母は家事万端をしてくれた

叱ったら女房の方についた義母
骨と皮になり無理言いとおす

朦朧の意識が泳ぐのは火か酒か
小説も詩も書けないで庶民の姿

川傍柳 初篇研究

(八十三)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

617 乳もらいに顔のよごれた男来る

眠狐

川端「乳貰い」は、産婦が乳不足なので余所を貰いあるくこと。乳母をおけないほど貧乏なので、その夫が子を抱いて、乳の余分にある民家をもらい歩いた。乳呑児をのこして産婦が死んだり、夫と赤ん坊を捨てて間男と駆け落ちしたりする例も多い。ここでもおそらく女房に逃げられた男であるう。

乳貰いの夜明も近くだますなり 九・37

乳貰いに大の男のむごいこと 九・25

高須「顔のよごれた」を、顔に泥をぬられた、すなわち女房に逃げられた男と解するのうがちすぎではないと思う。乳もらいの句には、うらぶれた句が多い。

乳貰いの夜は米七しやぶらせる 傍五15

前田「顔のよごれた男」は間男して逃げられた男に賛。

丸「顔のよごれた男」をはっきりしておく必要がある。

岡田同。

618 床柱から盃をついとなげ

万颯

川端「無礼講の酒席か？ 酒宴たけなわ、上座の床柱の前に坐っているお大尽から、盃を投げてよこしたもののか、或いは盃を貰ったのは太鼓持か。

高須「床柱を背負っているのは、もちろんお大尽、うやうやしく下坐へ伺候した奴へ「それよ」と、盃を投げてくれた情景で、すでに酔いのまわった大尽の得意然たる態度が見えるようである。中には、盃をひょいとほうればわたしかえ

三・40

なんてトンキョウなものあれば、

盃で運の定まる大一座

一〇・21

なんて運命的なものもある。さて、この盃は

どつちかな？

丸「両説に賛。情景がよく出ている。

岡田同。

619 突出しハやく病神の娘なり

門柳

高須「突出し」は既出（初めて見世へ出された女郎）。「厄病神」とは幕下力士の異称（年中浴衣一枚で寒そうにしている様子が、絵にかけた厄病神のようだと、その名がある）——で、句意は、こんど突出しで出た女郎は、幕下力士の娘だ、というのであるが、どうせ出世の見込みのない幕下力士、貧乏は当然、娘を吉原へ売ったのである。柳雨翁は「人參のいる厄病神なり」といっており、「突出しの親人參をたんとのみ」という句もあるが、そこまで考える必要はあるまい。既出

突出しが見立てられると人がさり

つくと出すから突出しとタイコいゝ

5 4

のほか例句としては

突出しの一 二日はれまぶち 一・二

突出しは心し額で人を見る 一・三

突出しは七十五日客が来る 二・二七

前田 突出しは太夫付の妹女郎新造が昇格して一本立ちの妓となる場合と、家庭の事情ですぐに身を洗める場合とがある。後者はもちろん、前者の場合でも貧弱で経済的にもめぐる人が多い。それを厄病神にたとえた句と思う。

藤井 厄病神を力士の厄病神とは知らなかつた。「女郎達は貧乏人の門から出る」というだけの話。

丸 高須説も耳新らしいが、小生は前田説と同様、柳雨翁の説に従う。高須説では特殊すぎ、柳雨翁説は常套的だが「厄病神の娘なり」と直接的な表現で生きている。なお突出しについては先に岡田先生の明解があった。

岡田 吉原で幼時から育つて禿（カモロ）あがりの娘が始めて見世へ出るのを「突出し」とは申しません。十六・七才で身売りして来た娘が見世へ出るのを「突出し」と云い、それを「突出し新造」というのです。厄病神を幕下の取のいうのは、ずっと後期（おそらく明治期）からで、この当時ではそう呼んだ文献を知りません。親が厄病神に取り付かれて長年の病氣、やむなく娘が身売りをしたので、だからこの句がある

ユエンです。

620 いごきなざるとおいどを縫やすによ 一 甫

高須 〓おいどはお尻だから、句意は動くとお尻を縫ってしましますよで、着たまま縫いを縫って貰っている人間へ縫ってやっている人が言った言葉だが、その人物の設定は「ほころびを行く先々の手にかかり」迷亭?の一人者と、友達細君ともとれるし、居候と下女ともとれるが、この句の「縫いやすによ」という言葉の感じが、やや年カサのにお義と感じられる。

綻びのうちコタツから首が生へ 二・二六

綻びと子をとるかえる一人者 一五・八

綻びを縫ううちタイコ土俵入 一・三三

綻びを笑うは内義縫う娘なり 二四・三四

前田 〓賛。句中の人物は各自のこのみにまかせてよい。

清 〓「おいど」は上方言葉。この上方言葉から句の意味を解く手掛りは考えられないものか。

藤井 〓礎稿に賛。

のきなさい付木ばっかりくべなざる 五・三四

あれをまあ嫁で候とてわしはいや 四・三三

の句と同じく、一句中に会話語をそのままとり入れて人物や事件をビゼッドに直写している川柳の手法だ。部分的なのは

且那寺喰わせておいでさといふ 四・二四
よりたまへあがりなんしと新世帯 拾八

のように沢山あるが、本句のように全句中にそのまま取り入れた例はすくない。

丸 〓礎稿・前田説に賛。「おいど」は上方言葉であるが、江戸でも普通に使っている

岡田 〓同。「おいど」は「お居処」ですわの所の意味。始め宮中の女房詞だったのだが、物をあらわに云わぬ女性特有の上品なコトバとして民間に流れ、上方から江戸へも移入された。もちろん江戸でも女性が普通に用い、男は使用しない。つまり女コトバの一つ。

621 暑がりなくせにいらざる鑑着る 眠 狐

高須 〓土用干し風景。暑がりなくせに、よせばよいのに家重代のヨロイを着てみる。

暑気見舞家の重器を見て帰り 一七・一一

暑気見舞御凱陣かとしやれる也 四・二九

武者一人叱られている土用干し 四・二九

武者一騎まごつくを見る暑気見舞 一九・二七

前田 〓賛。「くせに」「いらざる」理くつばくかたい。

清 〓すでに何度か出た土用干の句。天下泰平の世の中じゃなければ詠めない句。

丸・岡田 〓賛。

八木摩太郎著

「古川柳に詠まれた
堺の人々」

送料共 七五円

活版印刷事始め

東野大八

全国各地から発行されている柳誌は、一体幾種類あるのだろうか。いいところ百五十という説があるが、それにしても一読三分のあえない柳誌とて月々発行するには並大抵ではない、金や手間はさておき頭数でざっと月五百人見当の人たちが、あくせくと原稿をあつめ、割りつけ、校正して袋におさめ郵便局へとでかけているわけである。

柳誌でいかにやきもきしてみたところで儲かるどころの話ではない。へたなものができ上ると、ノホホンとしている連中に限って好き勝手なことをいう。こんな手合いにつきさし回され、女房からはことある毎につき上げを食い、手弁当どころか、火の車の懷ろから持出し一方、当節は印刷屋も氣位が高うて、結局はそのごきげんを損ねまいとするあまりついむしゃくしゃとしてほたらかしにする、郵便局から第三種の脅迫がくる。どう転んでも柳誌の編集者たるもの、合うどころの話ではない。だが、しかも彼等は行く一偉大なる川柳愛に燃えて……この偉大なる忍耐と

寛容の情熱こそが、やがては柳界振興への彼岸へと発露されていくのである。「時の川柳」社には、東洋樹賞という結構な顕彰制度がある。一つ回頭一番、こうした縁の下でくもの果だらけの柳誌編集者にも、その栄光の分与にあずからしめるよう、とくとお願い申上げておこう。

というようなことをつい書いていると、一体、印刷屋というような技術なり、職業はどこから出てきたのか、ということになった。かくして文献を並べていくと、やはり元祖は中国であった。

北宋の沈括の書いた「夢溪筆談」に拠ると馮道が後唐の長興三年（九三二）五経の木版を刊行したことがはじまりのように書いてあった。この五経の印刷は、十九年かかっていた。日本の一切経の翻刻が、足掛け十九年かかっている例とくらべ、お経の刊行の類似性に愕いたり、感心したりだ。とにかく馮道のこの木版印刷が、中国における最初のものだ。五経といっても実際は九経（礼記、左伝、詩、

周礼、儀礼、易、尚書、公羊伝、穀梁伝）だったとある。馮道は、後唐、後晋、遼、後漢、後周の五代王朝の宰相であった人物（八八二〜九五四）で、後世無節操な人物であるとしられたが、愛民本位の行政手腕は往時高く称揚されていた。

この五経の刊本は、北条、足利時代に日本へ入り込み、これに頭からまる食われたのが北条義満。臣義満と明王にへつらって、日本国王の称を受けたとある。足利氏もこれならったようだが、中国の文化は一ケタおくれの形で徳川時代に流れ込んでいる。だが、それ以前に、中国沿岸を跳梁した和寇がいる。南宋時代から暴れ回り、これが図らずも日中文化の交流に寄与もしていた理窟にもなる。馮道の五経は、やがて元禄時代の出版ブームに顔を出す。

―それ四書五経をはじめ、大和書の戲草に至るまで、梓の数年々に広がり、既に吉野の山の桜木も切り尽すかとあやまる程に。すは見よ、黄揚版の三重韻起りしは、桜が絶え

しかと思えばさにあらで、黄揚はかえって版賃校より五割増じやという。(中略) 筆耕は当時の名人牧村伊六に筆垢をとらせ、一丁を一匁二分書に定め、僅かなす珍の筆料三百匁に及ぶ。版一枚のほり賃三十匁に至る。この版成就せし年、入目残らず取戻し年々利を得、今においてつげ版を用いること西は対馬を限り、東は松島におよぶ。(中略) つらつら本屋の身勝手を考うるに、多くは唐本を和本にするに始れり。中ごろ、史記、活法の争いにて七屋はおとろえ少紅はすたりぬ。されば金平、道乙両店の道鑑を一点となして一版に定め、片版の道鑑をば、朱子文集とか、杜氏道典とするならば、世のためといふ条、書林のたすけになるならん。史記、活法ともに同じ。これらは本屋の仲間倒し、たとえは一路に三車を押すが如し。近年、重版、類版御制禁たりといえども、京の版を大坂で重版し大坂の版を江戸にて類版すること、これまた憂いの一つなり。(元禄太平記)

これをみてもお判りの通り、当時(元禄)の本屋は、大うけにうけて、これがため過当競争で共倒れの景況だったことがわかる。

ところで、中国ものの、さきの五経の類は当時の知識階級にすれば唐本に依存し、和本註訳本はハナもひっかけなかったらしい。かくて——とかく書物も飛鳥川、符帖の変る世の商売、時うつり事去り、古版尽き新版興るなにかにも、永う流行るは好色本なり(同上)という態たらくで、エロ本こそ本屋のコヤシは、今も昔も変わりなく、かくて西鶴、門左衛

門の軟派に俳諧がベストセラーとなり、柳樗が続刊また続刊の上げ潮に乗ることもなかった。

さて、馮道の木版本が世に出ると、活版が登場した。宋の仁宗の世、慶暦年間(一〇四一—一〇四八)日本では前九年の役に先だつ。畢竟という平民が考え出した。

—その方法は、厚さが銅銭のふちほどの粘土に字を彫る。一字毎に一活字を作り、焼いて硬度を高める。一方、鉄版を用意し、その上に松脂、蠟をぬりつける。(これが接着剤) さて印刷となると、鉄製のワクを鉄版の上に置き、活字をならべ、鉄ワクを火で熱し平らな板でその面をおさえ、活字面のごぼこをなくす。二、三冊印刷するなら簡便とはいえないが、数を多く刷るとなれば、これほど手早く刷り上げるものはない。いつも二枚の鉄版を用意し、一枚の印刷中に、他の一枚に活字を組む。これを交互にすれば能率的である。各活字はみな数本ずつ用意され、「え」とか「也」などの字となると二十余本も用意されて、一版内の重複にそなえる。使わなるときは、韻別に分類して、各韻毎に紙を貼り木のワクに入れてしまっておく。用意のない珍らしい字は、そのたびに粘土に彫り、わら火で焼き固めればすぐさま出来上る。

粘土を用いて木を使わないのは、木は水にぬれると不ぞろいになるし、接着剤によくくつきすぎで、あとの整理に困るからである。粘土だとして使用後、熱して接着剤をとかせれば手ではらえばすぐバラバラになり、手も汚れ

ない。(夢溪筆談・卷十八・技芸篇)

「源氏物語」が書かれたあと、宋の時代にこうした活版技術が生れたことは、一つの驚異だが、その技法が今日の活版技術に全く酷似している点も敬服に価する。この二百年あつたに「新古今和歌集」「方丈記」「愚管抄」「万葉抄」などが出ているのだから、早いとこの活版技術を輸入しておけば、日本の文芸も百花りよう乱の出版ブームを現出したに相違ない。

昇の活版技術が出て、三百年あとの現代に木活字が流行し、清朝の乾隆時代(十八世紀)には、大小の木活字二五万本が作られ「四庫全書」が刊行されている。中国のこの活字印刷は、朝鮮に十五世紀ごろに入り、李朝時代には王立鑄字所が作られ、銅による鑄造活字がさかんに使われ、その活字本は日本にも伝っている。ドイツのヨハン・グーテンベルクが活字の母型を発明したのが十五世紀中期と

橘高薫風著

れも

送料共 五〇〇円

あるから、ヨーロッパの印刷技術も中国を考えると歯が立たない。

えらくカタイ印刷活字の話になってしまったが、たまには歩の悪い柳誌印刷でご苦労をかける印刷屋さんへのサービスをしておくのも悪くはなからう。

山川阿茶

三井 醉夢

池田あや子

好きで飲む酒、楽しんで飲む酒、飲んではならぬ酒、いやいや附合う酒、ペースを踏みはずす酒、方便としての酒、さめて悔ある酒、うさ晴しに飲む酒等々、いずれも男の世界の酒の一コマ。

アル中の箸から海鼠すべり落ち
医者には内緒互に陰で飲み
大男女に叱られ飲みに出る
パン声の軍歌にスキヤキにえつま
熱燗で直る病氣と妻は知り

梅志
娛句楽
半休門
真奇
恵二郎

酒とろりとろり大空のころかも
なアちろりこれから秋に親しまう
同路郎

タダ酒の上にタクシーで送られる 没食子
飲まされて味方を売って帰って来 同

十二月首だけ入れて呑んでゆく
君の顔で僕の顔だと呑みにゆき
同 同

ラッパ飲みあとで世話などさせてなや
文秋

おでん屋の方へ散歩の足が向き　塊人
酔いにかこつけてなかなか酔うていず

酔いざめの水はつむったままに飲み
久米雄

迷子札妻は俺にもつけたがり
塊人 生々庵

免職にならぬ程度でくだをまき 水洞
アルコール切れると養子らしくなり 同

お流れを頂戴に出る自己嫌悪 多久志
骨立てたまま二次会へついてゆき 豆秋

仕事の句から
要職につけばつく程責任と苦勞が重くのし

かけまくもかしこしお神酒水臭い 同
らりるれろはつきりしない程に酔い 同

要職につけばつく程責任と苦勞が重くのしかかつて来るし、下におれば下の苦がある。泣くにも泣けず眠れぬ日々もあるであらう。

男と女は肉体的にも精神的にも又社会的にも、おかれている地位、仕事の場、愛情の問題にせよ、全部とは云いませんが差があるのですから、自ら作る句もちがつて来るのは当然の事でしよう。このテーマを頂いて句集や雑誌をよみ「男っていいなァ」と思ったり男の世界のきびしさ、男の強さ弱さ等、今更ながら考えさせられました。ここには男の日々の生活から生れた男の体臭の強い句、即ち男が作った男の句を登場させました。

1 酒の句から

云いすぎた日は庭も掃き水も打ち
路 郎
月末の金さへ渡しや出てあるき
同 同
齒が痛いそうかと亭主出てしまい
塊 人
阿呆らしや人を憎めば胸痛む
さてとなりや逃げるひきようを男持ち

好 郎
オイ風邪をひくぜと男から折れる
伍 健
氣が合うてだまってまけた古本屋
古 方
落ぶれた友へお櫃のまんま出し
小松園
理解ある主人と云われ妬けもせず
梅 里
恩師機嫌わしも家内が苦手じやて
伊知呂
男一匹ニコニコばかりもしておれず

遠 二
拇印でもよいかと仲のよい保証
靈眼子
本當の涙は腹の中へ落ち
鮫虎狼
懷は空でも胸を張る男
春 巳
(かなづかいは原句のまま)

こう書きつらねて来ると
「男みな阿呆に見えて売れ残り」と云う私の
句を訂正しなければならぬようです。

三井 醉夢

「男の句」をテーマにと、漠然としたハガ
キを受けて、正直なところとまどっている。
女の眼を通して、男の句について何か書かそ
うと云うねらいなら、私の場合、困ってしま

う。内面的に女としてのものもろもの要素が欠
けている私なので、万事中途半端な眼し
かないので、どうもベンが重い……。

川上三太郎著『川柳二〇〇年』の中に『女
性の句とは、作者が女であると云うことだけ
ではない。句が『おんな』でなければならぬ
……戦前戦後の女性のありかたは、従来の
男の手になる川柳を伝承しているかに見える
が、やがて本来の女性にかえて、『おんな
』の句が撩乱と七彩の虹の橋を架けるであろ
う。……』とある。この文章がいつも私に
のしかかり、悲願のように、女らしい着想、
空転するばかりで、行き詰っている。

飛躍しすぎるかも知れないが、私は妙なこ
とを考えた。川柳に、性の必要性があるのか
と。今、おびただしい沢山の句を前にして、
全然予備知識ゼロで、百発百中、男の句、女
の句と選別することが出来るだろうか……。

戦後二十何年、大きな変動の中で、一応安
定した生活環境を得、昭和元祿等と云われる
大平ムードになって来た。いまわしい戦争の
記憶もうすらぎ、若い世代では、男性が女性
化し、女性が男性化しているとか。この流れ
を、川柳の上を考えることは、一笑に付され
危惧だと叱られるかも知れないが、何となく
男性は軟化して引く傾向にあると思う。これ
は、いいとか悪いとかの問題ではない。男は

男らしく、女は女らしく、天性を生かして作
句出来れば、これにこしたことはないが、日
常の身辺雑事を対象とした川柳から、自己凝
視、つまり人間としての自分を掘り下げて行
くと、性は影をひそめるのではなからうか。
句は人なりであって、句は男、或は女なり
と無理にわけが必要なのだろうか。

長いようで短い人生を、大きな流れの中に
浮き沈みしながらも、作句に燃焼、生み落さ
れた一つの作品は、人間の体臭があればいい
のではなからうか。

とは云うものの、人間の巾となると、男性
の方がはるかに広い。行動半径の狭い女性は
自分の小さな殻の中で、うごめいている。本
質的には、やはり違ったものが生まれること
になるわけか……。どうも私は支離滅裂に
なって来た。

するどい諷刺精神、視野無限、豊かなロマ
ン、詩性、抒情の横溢、……私の好きな作
品を思い浮べてみると、みんな、「男の句」
ばかりだった。

正月以来、いろいろとジレンマがあって、
句がつくれない。何とかやみついているこの
危機を、リラックスさせなければ、私は川柳
をやめるつもりでいる。

「男の句」で開眼し、いつまでも「女の句」
に進歩しない『おんな』は、今時分なら、花
吹雪の下に佇むビエロの孤独に似ているよう
である。

池田あや子

私が知っている男は、祖父、父、夫、この三代の男だけです。

祖父と父からはエゴイズムな愛情を盗み、夫とは相克の歴史を刻みつけて行くものでございませう。

世の中にはたく山の男の方がいらっしやいます。その中で、たった三人しか知らないと言ふことは、私が品行方正であつたからとは云え、これを裏返して考えるならば、如何に私が、女としての魅力に乏しかったかと言ふことにはかならず、残念至極でございます。左に私の好きな「男の句」を披露いたします。

俺に似よ俺に似るなと子を思い 路 郎

この句からは父性愛の権化を見、かなしいまで真摯な男の愛情を感じます。

酒うまし汲めども尽きぬ夜もうまし

三太郎

この句からは豪放磊落、野性の男が匂います。

糸ゆるめはぜに瞬時の夢与う

風来子

この句からは男の冷徹な理性を感じます。

以上三句、三つの面をミックスしたような男に出合つたならば、私は、語り明かしても悔いなしだろつと思ひます。

豆秋をおもう

吉田 水車

豆秋忌がまた近い日のうちに催されることと思うが、古い柳友の一人として、悲しくもなつかしい思い出がつきない。失礼ながら生前は決して物的に恵まれていたとは言えないようであつたが、心の方のおほらかさを作品の一つ一つににじませていた。

句集「ふるさと」に見る句や路郎先生の序文にある如く「ユーモアの血は川柳人の誰の血管の中にも流れている。川柳人にとってこの血ぐらい尊いものはないと私は常に思つてゐるのであるが、作家豆秋ぐらいこの血を多量に持つてゐる者は弘く作家を見渡してもそう沢山は居ないようである」と申され、又「古くから柳壇の一茶と言われてはいるが、俳人一茶ほどのあくどさのないのもそれがためである」とも書かれてある通り川柳を逃避の場とせず何人の追隨もゆるさないユーモア味あふれる句を作つた、それも豆秋の人生を基調とした社会詩が多いようである。

まだまだ沢山書きたいこともあるが紙面の都合もあるので、句集の中からどれがどうと捨て難いもののみであるが特に愛誦の數句を記して追憶のしるしとし、ご冥福とお導きたれ給はんことを祈る。

秋風の中で乞食に拝まれる
けなげにも家主の犬を噛んだ
直角に質屋の中へ折れ込んだ
一生の小骨を箸でよりわけ

出 征

塵箱に突つ立ち上り袂別す
うそにでもうまいと言つてやる夕餉
ふるさとの蟹が夢の中をとび

(須崎豆秋氏はS36年5月6日逝去)

★

川柳塔社常任理事会

四月四日——きょうの理事会は、マーシャン会という四名でひらく。

路郎忌は七月七日六時から

阿倍野区の以和貴荘を会場と再確認。

島根のむらくも川柳会が本年も銀桜川柳大会を催す。これが時の川柳社の大会とぶつかつかる。五月三日は岡山県下の本社同人の懇親会があり旅に出る日が重なる。

出席——生々庵、白柳、形水、一三夫諸氏。

近作柳 楠

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

みちこ
妊らず妻は夫婦の詩を綴り

村松 醉歩

「嫁して三年、子無きは去る」という前時代の言葉を意識してかどうか知らないが、みこもれぬ妻の寂しさや、悲しげな姿を暖かく見守ってやっている夫の気持ち、よく詠まれている。

ひとり待つ子どもを心の灯と勤め

荒井 良枝

受験の灯母断りを言うて寝る

楠 貞子

偽り多き世の中に真実一路のものこそ、親が子を想う至情であろう。

この母親達の句にもそれが、つましい中に尊く気高く感じられ、決して、上ずった教育ママ的な愛はみじんも感じられない。

中古車へ俺もこんなやと思う

樋口 一峯

おそらく、ポンコツ寸前の車を前にしての

感慨であろうが、人間も還暦前後ともなればエンジンの各部にガタがきて、つい自嘲の句がほとばしるものである、共感。

灯を消せば昂ぶる老いの残り火よ

江城 修史

「老い」とは果して、何歳ぐらいからをいうのであろうか、先頃亡くなった「ガマの聖談」の著者は古稀過ぎてなお、青春の血が漲ったと述懐している。又路郎先生の句にも、「六十一まだ情熱は燃えに燃え」というのがあることを……。

白髪なら染めもしように禿げ上り

山川 勝子

スラスラと詠んだ中に、生身の人間としての宿命と、一種のユーモラスを感じさせる。

叩いたり振ったりラジオ気嫌取り

真山 国彦

毀れかけたラジオの気嫌をとりとり鳴らし、ている事と、現実の人間関係をうまく結びつけて詠んでいるようだが、惜しむらくは「てにおは」の省略が句を弱くしている。

バイバイも投げキスもして豆紳士

坂東 若芽

現代ツ子—といっても幼児だろうが、その生態を捕えて風刺を訴えている句である。

食前の祈りに腹が派手に鳴り

槇田 英詩

思わず微苦笑を禁じ得ない句、下五が実によくきいている。

両替を頼むたばこは二つ買い

中谷 利美

これも下五を強く利かして、デリケートな人間の弱い心理を突いた名句である。

紙面の都合で選評の出さなかった佳句をあげて句主に敬意を表します。

かんじんの話へ酔うた振りをされ

岡川 洋々

焼きいもの値に親しさが消えてゆく

小出 智子

香水を好む女で夢多き

宮西 弥生

米でさえ作るなという世に変わ

近藤 秋星

病名は不明注射を打ってくれ

渡辺 南奉

七回忌御無沙汰同士顔が合う

大工 静子

やがて散る花の姿の極まれり

吉岡 嘉子

爪染めて男のあらをみんなり

平野 青夜

ブランコのような人生かも知れず

三宅 不朽

この人へ賭けて見る気の足袋を脱ぐ

船木 史郎

(次号は西尾 葵氏担当)
(おことわりノ小松園氏急病で同人吟は次号)

古京の芝草

(興福院にて)

阿 万 万 的

佐保路と云う言葉には、それ自身美くさいすみ切った余韻を残すが、何かしらつめたさも感じる。今日私が訪ねた興福院(こんぶいん)もその例にれず早春の匂いがびつたりのあるところである。もちろん一条大路から北へはいる道には桜の古木がある、中には遠州好みの小庭園もあり植込みが色を添えているのであるが、今日はそれ等の蕾も固く、掃き清められた簀の目には肌に響くほどのきびしさを感じた。

早春の冷え尼寺の簀の目

万 的

ここは尼寺である、その正門の右脇に「不許酒肉五辛入山門」のいかめしい石標が立っているが……、このたたずまいには何かしら不似合なものを感じたのは私だけだろうか。

そして門をはいると広い階段がつらなり、中門を通して本堂の屋根が見える、そして細部にまで行き届いた造作とうまくマッチした石畳の道と掃除のあとには尼寺特有の静寂があり身に迫ってくるものがある。

此頃ブームに乗って奈良の寺々を訪ねる人

びとは多くなつたが興福院を知る人が案外少ない、そのせいもあって今なお閑寂が保たれており、それだけ私は有難いなあ……とも思つた。

忘れられた寺にも春待つ空があり 万 的

興福院はもともと藤原百川(ももかわ)建てた寺である。この百川と云うのは道鏡が皇位を継ぐのをさまたげるため和氣清盛を宇佐八幡へ使ひに立てた本人である。そして失脚した道鏡らの報復の意途をそらす為の寺院建立であつたらしい。

しかし、今私が訪ねている興福院は昔のものではなく、古代權威をうまく政治等に利用した豊臣秀吉の時代的背景により再興せられたのであるが、豊臣滅亡と共に一時衰退はしたものの、三代將軍家光のとき、寺領が復活せられ、増築改修には小堀遠州等の指導も得て今日の形を整えたのだそうである。

み仏にさえ曲折と幸不遇

万 的

拝観の案内を乞うと中年過ぎた、こぎれいな尼さんが本堂の方へ案内して下さる。そのつつましく歩く白足袋が印象的に私の眼をとらえた。

本堂の中へはいると私が阿弥陀如来の前に座すのを待って、尼さんはずっと入口の方へさがってきつちりと座り仏像や二十五菩薩を迎図の説明を下さる。

そして阿弥陀さんの金箔が後から押したものであり、もしその金箔がなければ国宝にも

おされる秀作でしたのにと、軽くくやむように言われる言葉のはしにも、その上品さがはつきりと覗がわれる。

縁へ出ると軒先に直径五十糎もあるような大きな蜂の巣を見つけて、私が見上げていると丁寧に、不退寺さんにもこれと同じようなのがございまして中を開いてガラスの箱に納めておられますと教えてくれ、その巣の中の様子を名工のノミのあとのように敬語をまじえて説明してくれるのにはまったくもって恐れ入った。

謙譲の言葉にもある寺の格

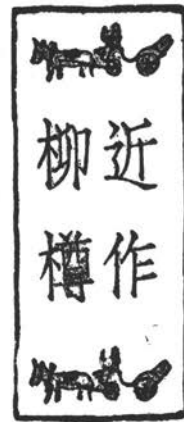
このあたり佐保丘陵の一部を寺域としてるので伽藍をつなぐ渡り廊も野趣に満ち、庭園の木々の濃い、かえって黒いぐらゐの緑がうまく調和している。又本堂正面の敷石がわずかにぬれてゐるのも何とも言えぬ風情である。

まったく自分は、よい時期に訪ねて来たものだをつくづく感じるのだった。

春愁そのまま尼寺のぬれた道

放心したようにぬれ縁に腰をおろしてると春はまだまだ浅いの鳥の声が聞えて来るふつと吾れには帰つてみたものの、それが何の鳥であるかわからない……しかしそれでいい、それでいいと自分に云い聞かせる様な気持ちで早々に挨拶をすませて、この寺を辞すことにした。

佐保山の早春は午後の陽ざしにも冷たいものを感じる。私はその印象を大事に抱くようにして帰路についた。



北川春巢選

大阪市 島田雄峯

魔がさしたなみだも無色にて流れ
たよりない夫の風呂のぬるい事
酔さめがぼつぼつ茶漬たべに起き
ペラペラと責任ないのがよく喋り

岡山県 武内雅堂

満開の桜に酔えぬ車椅子
歩道橋渡る少年に明日がある
宝くじ当り貧乏あわてさせ
引越してくれば隣りの犬が吠え

今治市 渡辺南奉

信じてるとは金のことむなしい日
又もとの孤独に戻るテレビ切る
灯を消して又一日が暮れただけ
ちっぽけな夢万博へ手内職

鳥取県 両川洋々

言い分もあろうに妻が詫びてくれ
妻だけが私の味方とは淋し
年頃の理屈へ父も母も負け
本能の悲しさ無精卵を抱く

鳥根県 堀江芳子

残業の子の靴音へ月と佇つ
欲しいものばかり茶碗やのぞいても
寝不足も土産の一つ旅帰り
二人いて子らにも劣る喧嘩種

鳥取県 鈴木村飄子

過密過疎舟がそっちへ傾くよ
女房にネジを巻かれて出て来たが
雉一羽死んだ夕餉が待ち遠し
一生の豊作妻が楽天家

貝塚市 行天千代

溜めて死ねば子は競輪へ捨てに行き

受験勉強へテレビも止めて協力し
二人目が出来て朝食パンになり
孫が来て湿めった空気取って呉れ

島根県 大 峠 可 動

退院の心の新譜聴く家族

本当の倅せ遠き人ばかり

孤独いま心の塔を駈けのぼる

わが里の一角ビルの角が出た

東大阪市 坂 東 若 芽

悲しみもぬぎ捨てましょう春が来た

花売りが春を集めた声で来る

梅志・弓彦様の死を悼む

天国の句座なつかしき師を囲み

大阪市 江 城 修 史

管理職つきあげられた勇み足

求めてはならぬ心へバラ朱し

回想の一時心の虹が消え

大阪市 小 谷 葉 子

たぐり寄せる愛の鎖は重たすぎ

愛停止して泉に銀貨投げ

野菊折りかねる心満ちたりて

東大阪市 宮 西 弥 生

欠点を探し合うてゐるすきま風

確かめてみたい愛へウソをつく

プラトニッククラブで退屈して別れ

八代市 船 木 史 朗

黙って寄附をした日の充足感

減反のニュース飯場へのしかかり

骨董の価値がわかって採め直し

札幌市 平 野 青 夜

2DKそれでもおまえのうつくしさ

春の雪女の業は火と燃える

剣よりも強い涙で女生き

大阪市 河 野 君 子

万博公害家計簿にもひびき

偽り通した心冬のまま

葬儀に列して

美しき年輪乗せて柩行く

東大阪市 坂 上山 椒 坊

銀婚祝い

銀婚へ妻は小皺へ厚く塗り

銀婚式夫の白髪はととかれ

銀婚へ入歯に合わす祝い膳

大阪市 黒 田 真 砂

愛を断つ決意新な空の色

従妹結婚

打掛の重みに愛を実感す

待ちし甲斐ありと花嫁惚気てゐる

竹原市 三宅 不朽

薔薇のトゲ太郎の素手にうろたえる

淡雪よ口唇うすき女想う

市民税だけのお隣さん今日も肉

愛媛県 小笠原 仲美

遺産への配慮孝養怠らず

貧乏臭い商善人がさつをよむ

騒がれて金の卵が孵化しない

七尾市 松高 秀峰

無報酬の強みずけずけ物が言え

策もなくただ減反へ判を押し

病んで見て運勢欄に弱くなり

竹原市 岡元 春昇

思索まとまらぬ目につらきらきら

なめつくす桜に女が女見る

心ある故こよなく美しく醜し

愛媛県 嵯峨 本満子

嬉しさを素直に出せぬ過去のキズ

夫婦宅チャイムも嬉しい音で鳴り
失意の日母の愛さえうとましく

下関市 志賀 木石

人使う辛さにも耐え小あきんど

我が家まだ消費美德にしておらず

おしまいのひと言腹の内が読め

広島県 南条 露声

日暮しに仏壇のある明るさよ

ばんやりとして居て遮断機また下りる

万博へへそくり着物忙しい

米子市 増田 竹馬

一寸三針亡母の苦勞を知る蒲団

銷却のすんだ機械で古稀達者

本心と別な演技を心得る

岡山県 本倉 英峰

その人に会った日からの迷い道

内職にタイムスイッチかけ忘れ

生活のリズムテレビの枠で暮れ

和歌山市 飯家 和美

天の邪鬼その磐石が生きがいよ

夜は夜の雑念の城築く

寄りそいてびんぼう神のなれなれし

今治市 原 田 輝 親

カレンダー スードの分は仕舞ったとき

コマージュ パンティまでは見せて呉れ

停退と云う花道を消えてゆく

今治市 今 井 松 花

スーパーで逢うて挨拶そこそこに

振り向いて呉れぬ横顔綺麗過ぎ

子が出来てから内職を思い付き

今治市 大 本 バ ッ ト

筋通す筈の議論で腹を立て

稼がせてやった会社へ天下り

渗じんでもかすれても墨面白し

和歌山県 ふ き あ げ 虎 城

吸い込まれる磁力私にある一線

故郷を捨てて故郷のニュース知る

みだらさを知らないバラに刺がある

大阪市 河 原 林 比 呂 路

捨てる芥まで女見栄をはり

お世辞とも知らず鈍感うれしがり

能率化機械化人間酷使され

羽曳野市 前 川 桂 馬

給料を迎えに雨の駅で待ち

アルバムにふさふさの夫しまい込み

日旺大工嘲けるように漏り始め

守口市 野 呂 杜 月

ローカル線ミニで麦踏む娘も見える

争って親しみの増す善と善

さけたがる話聞くまい酒冷える

倉敷市 竹 内 翁 童

定年の男の髪はまだ黒い

農政の不信だまって田に生きる

コンマ以上の上役と知ってさからわず

島根県 中 島 英 子

封建をしのぶ明治の難かざる

トタン屋根アラレのコラスうるさすぎ

減反で蛙のコラス遠くきく

岡山県 目 賀 芳 月

おやこも百科辞典を飾ったり

平穏な卒業式が記事になり

ハッスルをして見て年だなと思ひ

大阪市 阪 上 十 止 庵

ひと筋の道ふり向けば妻がいる

正論は招かざる客ひとりだけ

母だけが出世するまで待つつもり

高知県 山 川 勝 子

平凡な生活を望む売れ残り

女房ならこそ散髪に行けの髻そのの

子沢山どの子にかかろか皆よい子

先輩の指図通りが義理を欠き
七転び八起きあつさり故郷を捨て
諫早市 原 田 明 春

大阪市 鈴 木 生 仏

万博の客には風邪もひかされず

万博の客をノースインのんで待ち

生活を見たさに万博だしに来る

八代市 船 木 き よ

声だけが叱っていると子は見抜き

魚屋の声で魚は生き返り

鳥取市 山 形 春 海

失敗は繰返えさない年が明け

はめられて仕事嫌いの日が続き

大阪市 影 山 一 風

ぬけがらの思案がとめどなく続き

退職に思う

馬鹿なやつと言われてさって行くあわれ

守口市 岸 本 豊 平 次

農を継ぐぐらいなことにいる決意

七人目の敵は靴をぬいだから

尼崎市 中 谷 利 美

現ナマで祝ってくれと言える仲

タコ焼の列で編んでる市場籠

今治市 薦 本 昌 道

竹原市 生 信 笑 子
レモンスカッシュほんとの事をしゃべり出し

耐えがたし我が青春の一ページ

熊本市 黒

田 緑

ストレスに耐えてか細い線で生き

三月の憂うつ道路掘りかえし

和歌山市 吉

野 富 子

まだ脈があると内気はげまされ

毒舌へ静かに返えず顔の色

和歌山市 田

中 正 夫

草生やす田に奨励金出す役所

還暦の妻に嫉妬の目が若い

鳥取県 林

露 杖

石段は乾き躑躅の燃えており

湯上りの爪きる女春の宵

羽咋市 三

宅 ろ 亭

生存権主張しているように雑草

湯気しきりわれにもたぎる心あり

河内長野市 森

本 黒 天 子

耐えて行く心に年齢が付いて来ず

降り積る雪は庭木を見なおさせ

東大阪市 落

合 思 月

すきのない女で貰い手まだつかず

御期待に添えず養子はひまをとり

寝屋川市 福 富 隆 子

だんだんに縮み物干に台が入り

式の日が迫りほっぺの吹き出もの

大阪市 藤 田 頂 留 子

プラスチックに花のミイラを閉じ込める

スーパール風景

目玉品つかむその手の早いこと

米子市 関 谷 成 子

お化粧ののらぬ四十路へあわて出し

万博の券も買ったと便り来る

岡山県 河 原 孝 女

老らくの恋文冗談ともとられ

うらはらの心舞台にコメディアン

兵庫県 荒 井 良 枝

示談書へ傷の痛みがなおつのに

一合飲むだけへ肴の選り好み

鳥取市 有 田 鹿 子

帰省子で四角の炬燵も丸くなり

万博で世界を二日で見て帰り

大田市 藤 田 軒 太 楼

入院手術

一発のガスを病室待ちこがれ

切ったのが巾を利かす外科病棟

大阪市 岡本 まさひろ

万博へ遠い親類来るたより

万博迷子センター

迷い子になる気のワッペン恰好いい

浦和市 吉岡 茂

駅ビルへ通い鯛やき焼くつとめ

使い込み露見を恐れ休まれず

大洲市 堀内 曉風

体面もこれまでと云う火の車

ふだん着になった社長の人情味

岡山県 片山 雅子

爆音を聞いて平和な空仰ぎ

ピアノ弾く子の指先へ春の音

今治市 古野 伶人

片付けてしても脱け殻夫婦なり

貫禄が出来て益々嫁き遅れ

今治市 真山 国彦

消防が届かぬところで燃えている

借りに来たのは銀行へ上り込み

今治市 伊藤 一郎

ブレーキを踏めば後から当り

面会は待たせ電話は直ぐに取り

島根県 榎みどり

遠い日の思い出たぐる桃の花

老骨をまげて執念の土いじり

八尾市 飯田 一治

鉄塔をよう登らずに蔓は枯れ

万博で調和異国のシルエット

大阪市 西本 保夫

ひょっとしてズバリ当たっていた左セン

女とはうまいウソつく平社員

兵庫県 高橋 近江

虫が喰うキャベツ安心して買われ

有名人との会談に株あがり

宿毛市 山本 窓花

心得ていてサボテンの刺にふれ

卒業へ始めて父の猪口を受け

松江市 津川 紫吻

亡母追憶

ひびの手が自慢の頃の母達者

任地での母の暮しの身だしなみ

神戸市 米住 タカ子

渦底の二人にも見える青い空

不義理のあいさつ電話でする不義理

泉佐野市 大 工 静 子

誰も来ぬ応接今日も花を入れ

老いた兄逢えば昔のようにほえ
洋蘭はやめて造花で間に合わせ

催足の出来ぬ弱さが貸ししぶり

岡山県 武 元 柳 子

どうしても呉れる金魚に鉢を買い

男はし女はしさの目と目と目
男には友もお酒も夜もあり

祝い酒校長が酔い無礼講

竹原市 楠 貞 子

棚一つ吊るに子の知恵妻の知恵

シワふえたシラガ増えたと気から老け
花札のように運が向いてこず

親馬鹿の見本は酒をのんだパパ

島根県 大 森 孝 華

姿なき系に人妻包囲され

病み上り菰着て春待つボタンなり
親心プラスチックの雛人形

ライバルへ情報もれる隙間風

広島市 横 田 英 詩

口笛でミニを追いつ越すレンタカー

チビッ子の英語まじりに面喰う
ウインドーよりも野に咲く花の欲し

知恵つけて名前出すなど念を押し

大阪市 白 石 良 圭

見るだけの着物売場へひっぱり

一万歩あるいて健康自慢する
万年床今日限りなる陽のぬくさ

ころぶスキーへ生理日まで交えて行き

高槻市 山 田 ス ミ 子

算盤に合わす予算を組んで見る

満開の梅持ち主を意識せず
鳥取市 藤 本 佳 女

辞書にない字を老人書きたがり

ケチン坊或る日の寄附へ見直され
鳥取市 藤 本 鎮 也

大阪市 松 岡 進

東大阪市 斎 藤 三 十 四

大阪市 田 中 多 幸

大阪市 木 村 洙 水

大阪市 花 田 繁 子

大阪市 村 島 秀 村

鳥取市 藤 本 佳 女

鳥取市 藤 本 鎮 也

鳥取市 藤 本 和 宏
泣き所心得恩師の叱りよう

鳥取市 藤 本 恵 子
羽曳野市

ふり袖はいつもの調子で歩かれず

岡山市 谷 森 和 風
失敗も経験やらして見る商談

見栄はって暮らす団地につかれきり

笠岡市 山 本 柏 生
気安めの駐車禁止の札になり

釣船の獲物船頭のものばかり

八幡浜市 別 宮 すすき
遊園地姉は恋人僕木馬

雛の眼に語ると雛の眼が答え

竹原市 簗 田 浄 美
誤魔化しのきかぬ数字をもてあまし

好きな人いたらいいナの日曜日

鳥根県 榊 原 秀 子
雨降って眼の色変わる穴ファン

Uターン故郷の味をかみしめる

神戸市 横 山 孜 孝
昭和元禄けったいなのがうけている

万博へ子守りさす気で居る女房

鳥根県 志 賀 美 栄
春の曲風も奏でて通り過ぎ

燃えつきる愛の炎は音も無く

鳥根県 東 原 福 子
人形師生きた人形と共に逝き

木枯が野をこえジャズを奏でくる

富田林市 川 端 文 一
花盗人頭にさして笑ってる

星かげのワルツよりそって行く土橋

大阪市 平 井 露 芳
へそくりが大金となりもてあまし

デモに行く夫を笑顔で送る妻

大阪市 今 井 隼 人

川柳のたわ言

古川 鶴声

川柳は自分の物であって他人様が欲しがる文学であらねばならないと思う。更に現在の各柳誌を見ても、俳句のようにすべてを句で言い現わしたのが多い。私の思う川柳は、三つの原則から生れたものと思う。その原則とは「真」「情」「美」であって句の中に味わいのこもったものと思う。要するに句はスルメイカのように見ただけでは味も何も判らないが、このスルメイカを噛みしめてみることを噛みしめていけば、ほんとうの言うに言われぬ香ぐわしい味がするものである。

川柳もこうした味の有る句を作りたいものである。

選者もまた自分好みの句を抜くより作者の心の句を味わって選をして欲しいものである。

それには流派を問わず、心大きくこの会でも顔を出して研究することだと思う。

柳人の中には「彼処は流派が違うから行かない」と口には出さぬが、毛嫌いする人が多くあるのは川柳発展に大きな障碍であると思う。

かく云う私は出来る限り何所の句会でも暇と余裕があれば出席し、没になるうが、抜けようが、そんな事はお構いなくただ会場のフシイキと人の句をきくのが楽しみであり、ま

た研究の種にもなるので末席を汚がさせて頂いていきます。私が川柳に馮かれたのは今治の当時、大阪の川柳雑誌(現、川柳塔)今治支部発会式に長野文庫氏に誘われてからです。発会式は昭和九年五月だったと思います。それから今日までの間に故前田伍健師に教わり故路郎師に紹介された文通に依って指導も受けて今日では自分だけの句で他人様の欲しいる句を作るのに懸命です。

土地カンの句

浅野 芳朗

去る日、句会で土地カンの句ウナンンの話題が有りました。それは薫風さんの「彼岸会の無音無明(無明が先だったか?)」は亀にありの句は、私にははっきり宗教的な句と想って、知り合いの僧侶に何の意味かと尋ねたところ、首をひねって判らないとの事から前記句会で先輩、先生に伺って見たのです。や

やあってこれは大阪の人でないに判らない句で亀の池のことだと結論が出て、なる程、年の功より亀の甲だわいと感心はしたのですが、そうなんと、いかに秀句名句であろうと局地的な句では無案内の人達に成程と思えるのか、どうかと疑問に思えるのです。

勿論小松の句会の中でも「亀の池の事だ」と看破する先生も居られる事もあります

(この先生大阪に長い間住んで居られた由)秀句とするには、どんなものでしょうか。けっして薫風氏の句を攻撃するのではなく、いわゆる「何処そにて」「何々にて」の前記付説明を要するものは一考を要するのではないのでしょうか。(但しスケッチ句として)秀句にする事に疑問を感じるので。その時の句会の題に「新築」というのがあり私の句「御馳走になる棟上げの綱を持ち」

が特選になったのですが、ここでもまた土地カン論が出て石川県や田舎の人には新築の家の棟上げの日に何か一寸でもお手伝いという意味で、タルキの一本ヌキの一枚も担いだり棟上げの綱のハジっこを気持ち程度でも持ってお祝する。その後で御馳走になる慣習がある事を知っているからいいが、都会で果して通用するかが問題、という、全くそういえばそうだと恐ろしいような気になりました。大阪の人でも白柳さんなら判る筈だという笑いに、少し助けられたような気がしたのですがどんなものでしょうか、亀の池の話をも少し詳しく(由来など……)発表して頂けたら幸いです。

若本 多久志 著

「親ごころ・子心」

二〇〇円
送料六五円

「老いの坂」

四五〇円
送料七〇円

清水白柳選

妹の乳房は摸糊として眩し
血の氣引くように障子が昏れてゆく

松原市 谷垣史好

告白はよそう 地平線炎える

大阪市 小谷葉子

背のびする向日葵 負けられぬ私

今治市 月原宵明

女ひとり生きる理性を凍結す
精薄へ二つの隆起神与う

高石市 川村好郎

老眼はくもらず視野は一直線
褒貶は合わせ鏡の中を さえ

青森市 工藤藤甲吉

なすことを有るか無きかの人も生き
天が知る地が知る人の愚かさを

八尾市 高杉鬼遊

貴婦人を撃つ銃口に弾丸がない
健保証 斃れるまでを走らねば

富田林市 定金冬二

真夜中の父の泪は 泪だぞ
風の牙おろかな父の胸を刺せ

盲人の愚痴は奥歯で噛み砕く
見えぬからこんな倅せにも出会ひ

島根県 堀江正朗

忘却があり金婚にたどりつく
雀むらがる 核家族など知らぬげに

大阪市 神谷凡九郎

命って何だろ 死んでないだけなのに
建設が破壊から始まる矛盾

神戸市 来住タカ子

パンタロンはき迷信も信じ 女
実印を捨てれば碧空近くなる

岡山県 直原七面山

脳軟化症の割に はっきり愚痴を言う
死んでから死んだその訳たずねられ

豊中市 戸田古方

陽の色がなんぼ混ぜてもでてこない
生老病 死 人形でこさえてみたし

倉敷市 竹内翁童

ためらわず赤信号を無視した日
減反を機に長男も村を捨て

抄 輪 九

ある女 仮面を脱いですくわれる
仕合わせな女素足で話しかけ
岡山県 武内雅堂

鯉のぼり 人は本来無一物
ふり向けば道草喰った跡ばかり
下関市 志賀木石

眼球摘出それから目刺しかわいそう
とうさんに上げてわたしの風邪が癒え
島根県 堀江芳子

過去は過去ソロバンで割るように
逆らえば雨はわたしにだけはげし
竹原市 生信笑子

スモッグの窓を飛び込む革命歌
年賀状だけのお義理で宿を貸し
姫路市 村上春巳

田の土が足で乾いている昼寝
下積みの無口意外な意地を見せ
倉吉市 奥谷弘朗

長生きをしろと恩給表が言う
咲いて散る間を暖房のそばに置く
小松市 馬場魚山

こんなバカげたことにさえある台本
いつしかに父 大声を忘れたり
大阪市 阪上十止庵

酒を信じ或る日予感のガス匂う
小松市 四方天弘美

真実の日記は胸に描いておく
竹原市 三宅不朽

消しゴムのチビルがままにある情性
枚方市 宮川珠笑

信号の青は覚えているギブス
岡山県 三輪康明

雨の音飯場を長い朝にかえ
鳥取県 鈴木村諷子

筆まめな妻でいよいよ筆不精
岡山県 出原敬一

さん悔して憐れみを乞う群れにいる
米子市 八木千代

屈かない恋よカードの手も冷える
倉敷市 水粉千翁

倉敷市	小野克枝	鳥取県	今村夕路
東大阪市	竹中肖二	羽咋市	三宅ろ亭
笠岡市	出原真奇	七尾市	松高秀峰
父の死が怪をかじった身に重い	大阪市	宮地双楽	病んでから手近かに数珠のある暮し
岡山市	川端柳子	岡山市	川端柳子
万博よさらば 出稼ぎ次へ発つ	鳥取県	両川洋々	チャンスかな ピンチかなと画く砂文字
東大阪市	竹中	東大阪市	竹中綾女
いま玉子要るのにヒヨコもろて来た	愛媛県	渡辺暁童	山茶花の花芯の雪が陽に溶ける
この年で妻オーバーを持ちましよう	大阪市	島野大吉	三界に女 家あり里帰り
大阪市	野大	八代市	船木史朗
廃校へ極の木植えて教師去る	大阪市	酒田清子	売る為の眉へも女愛をこめ
大阪市	田清子	大阪市	宮尾あいき
斗病へ治療に格差なき安堵	桜井市	岩本雀踊子	夫待つ夜 沈丁花せつなく匂う
神戸市	仲どんたく	神戸市	仲どんたく
静かなる戦いよ 女対女	大阪市	木村水洞	平穏な入試新聞種となる
札幌市	平野青夜	札幌市	平野青夜
偏食と知らずに届く季節もの	松江市	津川紫吻	やみくもに人の恋しい春の雨
大阪市	西川誓二	大阪市	西川誓二
ハンカチを帯にはさんで母墓参			念仏も上達したと聞く先祖

岡山県 浜野奇童
就職の荷物あふれる山のバス

羽曳野市 麻野幽玄
腹の立つ話わざわざ呼びとめて

和歌山市 秋月宏方
八十で働く人に励まされ

島根県 小砂白汀
正論を吐いて進退きわまり

下関市 桜川不水
みの虫の押せば生きてる汗を出す

松江市 柳楽鶴丸
七〇年代日本にどんな花咲かす

大分市 正本水客
奈良修二会

ナムカンジザイ美事にテンポ変えてゆく
走りの行 無言にかえるリズム持つ

ひとり身に虚像のドレス真白い
今年も春風が傷痕を撫でる

（前号）ポケットに腕 その腕をほり出そう—は、志賀木石と
訂正）

入選句の中に破調の作品があることについて疑問を持たれる

方があるかと思うので一言触れておきたい。

作品は定型でなければいけないと言っても居るのに何故破調の句を選入れたのかということだが、それは破調の作品にも、定型を踏まえた破調と、定型を無視した破調があると思うので、定型を踏まえた破調作品を選入れたということである。

こうした作品はいろいろ推こうしてみても定型にならないがどうしても捨てられないギリギリの線での破調句として認めてゆきたいと言うことなのである。例えば

告白はよそう 地平線炎える の場合でも「告白はよそうよ地平線炎える」と一字入れればいいではないかと言えるかも知れないがよの一字を入れることによって、作者の意図している作品とは違ったものになることを、おそれたからで、この一字の持つ大きな意味を考えてみたいと思うのである。



中野のゴールドコンブ

NAKANO'S
ゴールドコンブ
日本のチューインガム
GOLD KONBU

中野物産株式会社

本社 東京都中央区新富町1-10-4 TEL 03-221-9201
東京支店 東京都中央区新富町1-11-9 TEL 03-625-2195
名古屋支店 名古屋市中区八木町2-1 TEL 052-571-5694
福岡支店 福岡市中央区2-9-1 TEL 092-55-1411

川柳徳川記

(十四)

富士野鞍馬

家 齊^{なり}

十一代家齊は一橋治済（はるすみ）の子で、吉宗の曾孫にあたる。安永二年（一七七三）癸巳に生れ、天明元年（一七八八）家治の嗣となり西丸に移り、同六年（一七八六）家治が死んだので、翌七年四月十五才で將軍になったのである。

田安系の松平定信を老中筆頭として、善政を行なった。長ずるに及んで好色將軍といわれ、四十人の側室を持ち、そのうち十六人の妾に五十五人（男二十八人女二十七人）の子を生ませた。（うち三十人早世）

天保八年（一八三七）引退して大御所となり、同十二年（一八四一）六十九才でなくなった。

松平定信

松平定信は、吉宗の次男田安宗武の第三子で、白河の城主松平定邦の養子となり、越中守と称したが、十一代將軍家齊の時老中に

なった。幼にして学をおさめ、田沼没落後は正反對の改革政治を強行した。その寛政改革は後世にも大きく伝えられている。文化九年（一八一二）職をやめて「菜翁」と号した。改革直後には

白川の清きに魚はすみかねて
もとのにぐりの田沼こひしき
という落首があった。

寛政改革

寛政改革には、出版禁令が出て、洒落本なども弾圧をうけ、川柳句集である「誹風柳多留」は、そのうちの風俗、賭博、役人等に関する句は削除されたのである。

この改革は七年で終り、文化、文政の奢侈時代となり、浮世絵が興り、清元節が流行し通人というのできて「大江戸文化」といわれている。十返舎一九の「膝栗毛」もこのころの作である。

子女降嫁

家齊の多くの子女は、それぞれ大名へ降嫁せしめ、その十二人のうち第十一子峰姫は、小石川の水戸齊修に、第三十二子溶（やす）姫は本郷の前田泰資（やすなり）に、文政六年（一八二三）嫁して、御守殿門（赤門）が建てられた。それを、

御恐悦梅に根分けの姫小松
姫松を梅の添枝へ御手いけ
梅へ他家から千代かけて姫小松（九六三六）
梅へ松植えるで茅の池をふさげ（二〇三八）

御良縁梅に香を増す松の風
親玉の婿梅公の芳衆方（二〇五八）
（一九九）

などと、前田家の紋梅鉢と將軍家を松として川柳に詠まれている。

また第四十一子喜代姫は、文政七年（一八二四）に酒井忠学に嫁したので、

親玉の娘勘弥の嫁にやり
と、酒井家の紋と守田勘弥の紋とが、同じカタバミであるので、役者に洒落て、「親玉」は將軍と団十郎の愛称である。（八三三五）

家 慶^{よし}

十二代家慶は家齊の子で、天保八年（一八三七）四十四才で將軍になった。水野忠邦を老中として、厳しい天保改革を行なったのである。そして嘉永六年（一八五三）六十一才で死んだ。

七代目団十郎

七代目団十郎は、將軍になぞらえて「親

王」と愛称され、歴代中の名優であった。天保十一年（一八四〇）には、「勸進帳」を創作し、歌舞伎十八番を制定したのである。

親玉の出端きっかけに扇の手（二〇七）

―扇は家康の馬印―

親玉が背負ふ舞鶴の樽下（二二二六）

―舞鶴は江戸城―

親玉が出ると思物土間でする（二〇七二）

―民衆土下座―

親玉を呼ぶ水筋も樹つなぎ（二〇七九）

―江戸水道―

親玉の土地を動かす御守り（二二一三）

―どこへも行かず―

太刀打はせぬ親玉の御一芸（二二二八）

―立廻りはしなかつた―

親玉の守護は成田の御尊体（二二二三）

―成田屋―

などとその親玉が川柳に詠まれている。

天保改革

老中水野忠邦は、天保十二年（一八四一）に大改革を断行した。それは風俗矯正、儉約、低物価、人口政策等で、まことに厳しいものであった。

柳亭種彦は、その著「田舎源氏」で取調べをうけて自殺した。また為永春水も人情本で罰せられて、七代目団十郎は、儉約令違反で江戸追放、落語禁止で都々逸坊間歌も江戸払いになった。そして「誹風柳多留」も百六十七編を最後として発行を禁止されたのである。この改革に対しては、大名、旗本などから

反対の声が起り、老中の土井利位（としつら）が、その先頭となって策動したため中止のやむなきこととなり、改革政治二年で水野は失脚した。

天保十二年に「柳多留」は終刊となったが、五世川柳が、内容を順法、新風に改めて「新編柳多留」を発刊し、嘉永二年（一八四九）の五十五編まで続けた。天保十三年には、江戸芝居三座は、浅草山の宿（猿若町）へ移転したのである。その頃の落首に、

とんだこと山が河原にのりました
山の宿あつがてねへ場所となり
というのがあった。

（編集部から）――近く「徳川記」がかわりますが、次は「川柳五十三次」が登場いたします。これは二十年の歳月をかけられたものを特に本誌へご執筆いただくことになりました。ご期待ください。（）

きのうきよう

本多柳志

◇来年行われる参議院選挙には、又々相当数の芸能タレントからの立候補がちらほらと噂されている。各党とも有力な新人の不足から、全国的な人気者を使いたいと言う所であろうか。芦田伸介、一童斉真、NHKの宮田輝アナウンサーと言う所が当選確実組という所らしい。山田勇や青島幸男らの例から見

ても、まず間違いはないと思うが、こうしたタレント議員については、各方面で議論もあるし又是からも色々と意見も湧くことであろう。参議院といえども政治の場である。唯タレントとしての人気や実力だけを利用して政治の場へ送ることは、山田や青島らの議員としての実績や彼らの舞台やスクリーンでの仕事からも問題がある。有権者はタレント候補には投票すべきではない。とする意見。

◇もともと参議院は必ずしも政治の場ではない。参議院議員は全国的な規模において、各業界の代表者であって、業界は彼らを通して其の意志や希望を政治の上に反映させたいとするのが本来の目的である。青島がピンク映画にのるのも山田ノックが舞台で馬鹿騒ぎをやるのも、元々之が彼らの家業なのである。会社社長が議員生活の余日に判コを押すのと医師である議員が、聴診器をもつのと別に変りはないではないか。議員活動の実績と云うがそれでは、社長や医師の議員の方はどうか有権者には投票の自由も立候補の自由もあるとする意見。

◇どちらにも一理はあるがどうも、タレント議員反対論には軍配は上げかねる、と云うのが妥当な所ではないだろうか。

若し仮に路郎先生や水府先生が立候補していたとしたら、我々も政治家としてよりは立派な柳界の代表として彼らに一票を入れて、参議院へ送っただろうと思うがどうだろうか。

漫才は政治を叱るギャグも持ち

柳志

横 道

藤井明朗選

横道のここはネオンの招くところ
 憧れの都会で横道踏み迷い
 病院の横道試歩の場所にされ
 横道にそれて人生廻り道
 息詰るムード横道よりほぐれ
 横道があつて頑固とぶつからず
 横道を歩き疲れたノスタルジヤ
 人生の横道へんなとこにそれ
 横道に迷い松茸のいい香り
 子について歩けば横道ばかり行き
 郷愁をそそる横道たそがれる
 横道も無駄でなかった立志伝
 横道に横道がある手が招き
 横道へそらす話は酒になり
 横道へそれて恩師の意にそわす
 横道について手を出してもてあまし
 横道の多い政治に腹を立て
 常連の横道ノレンを通りかね
 横道に曲るゆとりもある身分
 横道にそれた話は願で聞き
 横道に住んでしつかり金を貯め
 芸が身を扶け横道それたきり
 横道にそれた話が座を湧かせ

洋 女 々
 佳 子
 英 子
 肖 二
 柳 子
 隆 子
 福 子
 月 子
 竹 馬
 成 子
 軒 太
 松 花
 芳 仙
 正 朗
 鎮 也
 弘 朗
 文 子
 ト ク
 秀 峰
 どん たく
 七 面 山
 葵 水
 章 雅

横道にそれた縁談まとまらず
 横道がここにもあった日記帖
 横道へ誘う女の立話
 つまずいて横道だったことを知り
 横道へそれて尾行を遣りすこし
 横道でゴム長を履く分譲地
 横道は風鈴の音虫の声
 横道にはいり意見が百出し
 横道を歩いていても我を通し
 横道をさせるおんなが待つて
 横道にそれがチャンス掴む縁
 横道へそれてつかんだ儲け口
 横道へ人間不信の顔が消え
 横道で何かもめてる影ぼうし

佳
 氣をそそる灯が横道へ派手につき
 金とひまとい横道へそれたがり
 のれんの重みが横道にいまも生き
 横道へ蹴つてた石が曲りだし
 靴すべり横道するというて出ず
 舗装まだ横道だからあと廻し
 談論風発横道のそれもよし

人
 横道に屋台置かれたままの昼
 横道のぬくみを知った向い風

地
 横道になつて残っている街道

天
 鋭角に横道つづいているネオン

軸

雅 堂
 鶴 丸
 紫 吻
 露 杖
 代 男
 大 吉
 伶 人
 木 魚
 い わ
 千 翁
 凡 九
 曉 風
 静 歩
 利 美
 仲 美
 芳 子
 新 之
 古 方
 初 甫
 曉 明
 パ ッ
 孝 華
 輝 親
 奇 童

メ 毛

高橋操子選

どちらともなく横道へ歩が揃い
 カレンダーにメモをしい電話口
 ここでメモときき刑事をまごつ
 メモ帳の符号本人まで忘れ
 一片のメモを税吏は見逃さず
 メモが出て嘘が戸惑う刑事室
 妻の手で書かれたメモの通りする
 秘密めいてみえる符号の多いメモ
 人の目に触れないうちのメモ破る
 見られてはならないメモに恋を
 メモ一枚あの手この手のさぐ入れ
 屑籠のメモが出て来て解決し
 ハイミーで味付をする料理メモ
 メモ用の略字は自分だけのもの

ご投句にはぜひ、

川柳塔柳箋

一冊六五円・送料三五円

初 甫
 奇 童
 曉 明
 宵 明
 千 翁
 古 方
 素 身
 紫 郎
 祥 月
 静 歩
 保 夫
 雅 堂
 杜 月

忙しい姿で残るメモの文字 白
 メモ頼りまだセールスが身につ 福
 箸袋割かれてメモとして勤め 葵
 鉛筆がメモを探している電話 利
 アイデアの閃きメモへ書き止め バツ
 屋上でデートのメモを握らせる 一
 人の時のメモが出て来た衣更え 松
 人柄がそのままメモの走り書き 金
 演壇へメモが交代告げに来る 三
 鍵つ兎をお八つのメモが待つて 輝
 請求書へメモ割勘にして集め 親
 飲む相談午後机にメモ廻る 代
 急がしい暮しの中でメモが生き 仕
 一片のメモで献立出来上り 男
 メモ出して町長流行歌やっておえ い
 広告の裏が電話の用を聞き 朗
 もの忘れする年となりメモたより 芳
 洗濯機シャツと一緒に洗うメモ 双
 裁判所でメモ重大な証言し 楽
 佳 七面山 女
 メモ帳の隅で割勘わり切れず 洋
 母の字が目をはひく死刑囚のメモ 水
 病む妻のメモが入ってる市場籠 新
 交際の広さをメモが追いまくり 之
 妻のメモ今年のピーマン蒔く日 助
 人 木 芳 子
 先生 住所のメモを大事がり 鎮
 地 也
 やりくりのメモを達者に積んで妻 千
 天 翁
 鍵つ子へ済まない母のメモが待ち き
 よ

男

田垣方大選

声を聞くまでは男と知らなんだ 恵
 嫁さんをももらえと寮母縫うて呉れ 子
 女より女らしさをもてはやし 鎮
 どんじりで卒業出世した男 秋
 声聞けば男であつた長い髪 月
 男一疋女一人がままならず 思
 胎動のうちから男期待され 月
 男性化粧品女ほど持って行き 芳
 表札は男名前を出して置き 新
 夕涼男の方が行儀よし 之
 戦が絶えて男に生気なし 松
 結局は男の知恵に帰って来 白
 弱いから男は酒へ逃避する 汀
 来るとこへ来ればこの人でも男 奇
 ピーターの女装声までかえられ 童
 男だから涙かくしてする笑い ト
 大の字になつて男の明日の夢 子
 男からいわせは無駄なイヤリング 翁
 男の子でしよう赤チン塗つて 静
 男みな野獣に見える夜の蝶 歩
 赤いシャツ髪も伸して男です 素
 あんな髪あんな服着て男です 身
 逆境に真の男の土根性 郎
 軒太楼 素
 奇 勝 春 日
 童 子 郎 郎

反骨の男で情にはもろく 曉
 男なら抱けと女の目が笑い 七
 男もう原始にもどる髪かたち 面
 悪役のこころで男くさらせる 山
 すんなりと毒づく口をもつ男 芳
 男前かと割のいい浮動票 子
 男ですかと女がじれて 古
 耐えている男を無口かと思 方
 いままで甘えたいのが男で 古
 いれずみの男に焼き消す勇気なし 方
 男とはこんな姿で酔えるもの 風
 負けるとき負けて男の顔となり 反
 押売りへ最後に男腰をあけ 骨
 女言う今度は男に生れたい 男
 喜びも又悲しみも男飲み 男
 乳房には勝てぬが父としての愛 男
 叱られる役に男が廻される 男
 夫婦とはこんな男のどこがいい 男
 黙つても重し効いてる男親 男
 佳 久 露 雅 南 奉
 亭 声 堂 奉 堂
 男の子でしよう云われて泣き 伶
 男つて馬鹿な財布の中を見せ 人
 親切にされて男が負けている 芳
 応揚な男へ女良く動き 仙
 真実はいえず男は捨てられず 里
 人 千 代 士
 男の子ばかりですよという不足 風
 地 扇 水
 此の次の世でも男に生まれたる 千
 天 輝 翁
 金の無い男男と見て呉れず 親
 彦 彦

初歩教室

— 題「縁」 —

本田恵二朗

これだけ喧嘩しても切れぬ縁の糸 八郎
ほんものの縁の糸は、ぶんなぐっても、蹴飛ばしても、簡単には切れない。これだけ喧嘩して、増々強くなったのかもしれない。

縁談にちよつと先祖がさしつかえ 和風
恋愛結婚の場合と違って、見合結婚の場合はこんな例が沢山ある。日本的と言うべきか。

まだ舌を出す娘に良縁降って湧き 利美
縁とは奇なもの、こんなお茶つびいを、是非にと惚れ込んだのが突如として現れた。おつたまげた顔で、目を細めているおばあちゃん

良縁へうちの家風が思案する

露声

なにしろ明治二十年生れが、かくしやくとして、伝統の家風を吹き続けているのだから、現代娘を吹きとばすかもしれないよ。

上役が替りゴルフと縁を切り

慶彦

ゴルフ嫌いの上役へ、ゴルフ談義などしようものなら忽ち左遷だよ。賢明なる彼は、いさぎよく、ゴルフと縁を切ったのである。

春の縁小鳥の足音らしい音

静観堂

句主のデリケートな感覚に、うれしく驚ろく私だ。小鳥の足音を、無条件で頂いたよ。

降るほどの縁へ易者の智恵を借り 虎城

ほんとに結ばれるべき縁は、たった一つしかない。降るほど縁談があつては、うれしい悲鳴だ。神ならぬものの弱さが、とうとう易者の知恵を借りるも、あながち笑えない。

寡婦再縁噂さの渦の中にいる

誓二

寡婦というものは、何かにつけて噂の種にされるものだが、それが若かったり、美人であつたりすれば一層に噂の攻撃をうける。

再婚するとなれば、やっぱりねえなどと、妬くのがふれ歩く。庶民とはこんなものだよ。

縁やはりあつたのかと元の鞘 千代

家裁の門をくぐつたのが、帰えりは一緒に歩調が揃うなんてのは、はためいわくだよ。

良縁と喜ぶ母に妥協する

克枝

この辺で妥協せんことには、オールドミスなど、陰口を囁かれそうだという気持ちも手伝つて、母の喜ぶ縁に妥協した。芽出度し。

末っ子の縁談へ老をひしと知る

孜孝

末っ子も二十五才になった。そして縁談が出るほどになった。末っ子が結婚するまではと頑張つたが、その結末は、老妻と二人きりに

なるといふ寂しさのみが待っている。嗚呼！

金縁もまずまず妻と五十年

近江

五十年といえば、金婚である。よくぞそいとげたという感慨だけでも値打ちがあるが、金縁もまずまずとは、この人生九十五点だよ。

落椿傾きおうて無縁塚

露杖

無縁塚は、わびしく、さびしい姿のものだ。落椿が傾きおうて、無縁の仏をいたわっている姿は、あわれを感じさせる。

縁側でしばし断絶を取戻し

頼次

この断絶は、良き意味の断絶である。つまり日頃のご無沙汰同士が、久方ぶりに顔を合せたのだ。しかも春の陽がさんさんと降りそそぐ日向縁とあつては、積る話に時を忘れるよ

「秀句鑑賞と梅志句集」

送料共 五五〇円

秀句鑑賞にはあなたの句も出ています。

お申込みは本社梅志句集係へ。

くされ縁とこぼしながらも共白髪 一二三

大びらに、こぼすところは、逆も真なりで、お仲が良いことを証明しているよ。こぼしても、こぼしても、好感のもてるおこぼしは、聞く方も気持ちがい。共白髪ともなると、淡い味となつて、いや味もなくなるよ。この私などその部類に属しているようだな。

まだ縁が無くてもありもり金を貯め 保夫
将来を考えて、もありもりと貯め続けていると
解してあげたい。大いに結構なことだよ。貯
ったら、ちゃんと良縁が湧いてくるから不
思議だ。新婚旅行は、グアム島へどうぞ。

縁遠い娘の腹いせがビケを張る 大吉
なあるほど、ビケの中にはこんなものもあるの
かと私に教えてくれたが、こんな娘は、まず
まず縁遠くなるばかりじゃよ。

ペンの縁で結ばれ豪華船で会い 新之助
ペンフレンドが、豪華船でやって来た。それ
を迎える、いそいそとした若人の気持ちは、
純真で、善良だ。向うさんは、こうしてやっ
てくるが、こちらはともに行けそうにない。
でも行く日を夢見るのも楽しいことだよ。

ひょっとことおかめのような味の縁 仲美
この構図は明朗だよ。ユーモラスであり健康
である。ちよいちよい喧嘩もやつてるよ。

野良犬が飼犬になるそんな縁 仲美
飼犬になったとは、えらいご成功だよ。養子
さんらしい匂いを感じさせる。おとなしく善
良な養子の姿が浮んでくるよ。

金持ちを縁もゆかりもなく妬み 洋々
妬んでみても詮ないことだが、妬みたくなる
のが人間心理の一つであろう。ところが、或
る点まで貯つたら、そんな気持ちは、なんと
なく消えてしまつて、けろりとしてござる。

窓あけて新緑の候と書く手紙 軒太楼

題を縁と出したつもりが、活字を間違えて、
縁となつてしまったので、縁の句ばかり頂いた
中に、この一句だけが縁であつた。佳吟だか
ら發表した。上五の窓あけてが、明朗な句に
したし、中七も座五も共に、すらすらと詠め
て好感のもてる句となつた。句品もあるよ。
書く手紙の内容も、きつと明るく、楽しいも
のであらうなどと想像させてくれる。

縁日で駄菓子くるくる生きていた 露芳
子供の頃のなつかしい思い出の風景に、計ら
ずも出会つて、童心を甦らせてくれた。あの
頃のまが、月着陸時代に、生き続けていた
のは、ちよつとした驚ろきであり、うれしい
驚ろきであらう。叙法もよろしい。

コンピュータ縁談までも引き受ける 比呂路
世は正にコンピュータ時代である。結婚相談
所へ行つて、ボタン三ツ四ツ押してもらたら
幾久しき良縁が、たちどころに決る。なんだ
か味気ない気もするがねえ。

縁遠い娘を持つ母の気のあせり 静子
母なればこそのおせりだ。全く深刻であり、
真剣である。祈りたい気持ちであるよ。

くされ縁妻も地下足袋共に履き 儀一
地下足袋を共に履いての共稼ぎだ。それをく
され縁と言うは、妻をいたわる心と、感謝の
気もちと言わせた、謙虚さだ。夫婦共に澄
刺として労働する姿は、美しく尊い。

★
句を批評すること、句を鑑賞することとは
違ったものであることは言うまでもない。そ
のどちらにしても、それをやる人の主観によ
つてなされるので、違った評となり、鑑賞と
なるに決つてゐる。今回は、私が、私の主観
で、たっぷり鑑賞させてもらった。こんな鑑
賞をするのもいるということも参考の一つと
解釈して欲しい。ご熱吟を祈る。

題一海一五月二十日締切(七月号発表)

宛先、岡山県倉敷市下津井三五二

〒七一 本田恵二朗



磨かれた伝統の味

司菓子
鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
札幌店・札幌市東区南一条5丁目10番10号

大 萬 川 柳

「急 行」

入選発表

選 者 清水 白柳
 投句総数 六百二十三句
 入 選 七十七句

大 阪 慶之助
 急行で見るより鈍行で見たい富士
 倉敷 克 枝
 形身分け貰う急行券を買う
 堺 千万子
 急行待ちしばしれんげの窓をあけ
 松原 史 好
 明治思えば急行みたいな暮し
 高槻 静 馬
 急行券払い戻し得をしたみたい
 大 阪 阿 茶
 普通車に乗れば急行空いていた
 平 田 代仕男
 急行で乗り越し鈍行で引き返し
 大 田 軒太楼
 急行に間に合い土産買い忘れ
 大 阪 水 客
 急行の停る駅まで出迎える
 和歌山 虎 城
 急行券買って時間を持て余し
 和歌山 葵 水
 急行のないローカルで旅馴れる
 大 阪 柳 志
 白バイ急行ブン屋先着非常線
 岡山 康 明
 おそろいの顔急行で来る不倖せ
 倉敷 里 風
 江戸っ子が日帰り京である見合い
 島根 芳 子
 急行へこんな待たすローカル線
 八 尾 酔 々
 ラッシュには無縁特急空いている
 大 洲 曉 風
 急行も乗降客のない深夜
 東大坂 生 長
 急行で旅の疲れを寝て帰る
 小 松 魚 山
 急行バス市内に入ってから遅れ
 富田 美 代
 急行を停めた初声男の子
 倉敷 千 翁
 駅弁を買わせて急行発車ベル
 鳥取 佳 女
 急行の停らぬ駅へ左遷され
 鳥取 恵 子
 急行券買えば延着するしらせ
 岐阜 鱗 魚
 急行に男の旅は気が揃い
 大 阪 十止庵
 何をせくのか急行で情死芳ち
 熊本 芳 仙
 手術最中急行の顔が寄り
 高 石 好 郎

世コースへ急行出来るコネを持
 ち
 八 尾 鬼 遊
 計へ急ぐところが窓の月を追う
 大 阪 形 水
 淀駅で臨時急行空になり
 堺 天 笑
 急行が着いて湯の町動き出し
 堺 一 歩
 急行も停めたい駅の八重桜
 堺 草 春
 又遅刻急行停めたい気のあせり
 大 阪 金 三
 急行券キャンセルさせて飲み歩き
 笠岡 忠 三
 急行で来たのに接続バス発車
 松江 祥 月
 やつと腰下せば急行指定席

松江 孤呂二
 急行のつり革で見る花便り
 竹原 不 朽
 各停を待つ眼に急行ばかり来る
 岡山 柳 子
 急行に乗せたと老母の来るしらせ
 大 阪 あいき
 ギャンブルに急行停める世となり
 大 阪 凡九郎
 故郷はここで急行乗りすてる
 大 洲 曉 明
 急行に抜かれくやしの子の瞳
 桜井 雀踊子
 急行と知らずうつかり走らされ
 鳥取 無 閑
 特急に乗って心を落ちつかせ
 藤山 可 住
 急行通過冷たき女行く如く

特急で集金鈍行で寝て帰り

宝塚 ゆきを

急行に負けるもんかとハイウェイ

急行に乗って走りたい不安

大阪 小松園

急行の停らぬとこへ家を建て

急行で帰って来いといれ違い

大阪 滋 雀

急行で来たのに病人持ち直し

急行を目安に田植え昼にする

羽曳野 いわを

最終の急行が着き見当らず

志を立て急行で故郷発つ

富田林 花 梢

急行で寝る外はなしひとり旅

急行が通過の駅で夜が早い

米子 千代

急行を降りて古蹟へ引き返し

急行のように定退来てしま

倉敷 素身郎

急行がスピードあげた過疎地帯

係長までは急行だった僕

大阪 弘 生

払い戻しすれすれを急行延着し

間違つて乗れば急行よく飛ばし

尼崎 利 美

市内出て急行らしい音になり

急行を待つ間車掌も喫いに降り

急行が停り不吉な田舎駅
倉敷 扇 水

満員車待たせ急行からで発ち

倉敷 三林坊

急行の出前に葱を入れ忘れ

草餅の急行便でほろりさせ

急行で来たのに乗車拒否にあい

住 句

急行を停めてニュースになるお産

羽曳野 幽 玄

急行がはみ出て停る僕の駅

倉敷 里 風

特急へ妻と乗り込む一大事

大阪 庸 佑

電車こっこみな急行になりたがり

大阪 十止庵

急行の停らぬ駅のうまい水

人ノ 句

大阪 柳 志

急行通過牛が鳴いてる二番線

地ノ 句

富田林 きはち

急行を立ちずめできたい便り

天ノ 句

島根 芳 子

ウナ電へ急行はしゃぐ子を抱いて

選 者 吟

急行で拍犬だけが眼に残り

昭和四十五年度

ベストテン (四月現在)

一 利 美

二 素 郎

三 天 笑

四 扇 水

五 千 代

六 素身郎

七 千 翁

八 静 馬

九 好 郎

十 柳 志

十一 吸 江

十二 水 客

十三 ゆきを

十四 里 風

十五 幽 玄

十六 曉 明

十七 鱗 魚

十八 きさ子

十九 新之助

二十 恵二朗

二十一 芳 子

二十二 康 明

二十三 青 香

二十四 史 好

二十五 宵 明

二十六 可 住

二十七 三林坊

二十八 きはち

二十九 金 三

五、五 倉 敷

五、五 羽曳野

五、五 大 洲

五、五 岐 阜

五、五 岸和田

五、五 大 阪

五、五 倉 敷

五、五 島 根

五、五 岡 山

五、五 堺 原

五、五 今 治

五、五 藤 山

五、五 倉 敷

五、五 富田林

五、五 大 阪

昭和45年度第6回

「天 使」 5句以内

締切 5月20日

第7回 「まな板」 5句以内

締切 6月20日

投句先

大阪府高石市高師浜3丁目5-6

郵便番号 592 川 村 好 郎

季節料理・折 詰

大 萬

阿 倍 野 区 松 崎 町

TEL 63 5031・5032

南区豊屋町三ツ寺センター

TEL 24 9 1 8 4

柳 界 展 望

あちからこちから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼石曾根民郎句集「山彦」が昭和四十五年四月十日、松本市大手三の五の十三、の川柳社から発行された。麻生路郎先生の序があり、風土が生んだ稀有な郷土作家である。中略「川柳しなの」によって、所謂しなの調を生み出したことは人材の渺ない柳界にとつて寔に偉大な柳界に於て第一句集「大空」に続く、昭和十六年から昭和三十三年までの作品九八〇句が収められてある。路郎先生晩年の選句で、序にも「山彦」の選句には非常に慎重な態度でのごんだ。私は身心ともに疲れて眠れない夜すらあった。幾度か選稿を改めた。」とあるように、路郎先生の息もいづるは、B6判二百頁、上製箱入美本、定価六百元、郵送料七十円。三読すべき好著であ

る。
郷土色いちにち雪の降る灯なり
山近しわが身のうへを守るごと
子も枕持てり静かに月を
▼川柳きやり五十年史は、磯部鈴波編で昭和四十五年四月一日、東京都台東区入谷一の十四の六川柳きやり吟社から発行された。B6型四百頁、非売品。周魚の姿、勇魚の姿、川柳きやり吟社五十年史、社人一覧、社人一句、きやり年表などの内容である。
▼川柳噴煙吟社自選句集「草千里・第二集」出句募集要項、昭和三十五年から十年間の句の中から七句を自選して、応募用紙又は便箋に、雅号、自選七句、住所、本名、生年月日、職業、所属柳社の順で記入、六百円同封の上、六月三十日まで

でに熊本市南熊本四丁目二の八吉岡茂緒方、草千里事務局長。
▼川柳さつぽろ百五十号記念川柳合同自選句集の作品募集要項は、新旧作を問わず一口十句、用紙自由、氏名、雅号、都道府県名、年令、性別を明記、一口三百円同封の上、七月十五日までに札幌市水車町二丁目石山アパート嘉瀬信彦宛。
▼川柳さつぽろ四月号の「全国柳誌探訪」で斎藤大雄氏が川柳塔を紹介されている。「川柳雑誌廃刊後の川柳塔は創刊号から背文字の入った立派な雑誌を発行した。麻生路郎の遺産も大きかったことであるが、それよりも麻生路郎の名前を汚してはいけないという気持の方が大きかったのではないかと思う。」と。また「倉敷に川柳道場を構えている水粉千翁、本田恵二朗らが選者陣に加わっている。編集小幡里風、発行人日井三林坊の柳誌「たまし」山内静水が指導する学生川柳が主軸の「たけはら」、十年後はきつと素晴らしい柳誌になることであろう。」と両誌にも触れておられ

▼万博協賛番傘全国川柳大会は六月七日正午から日本橋東五の一〇、ビジネスセンター三水で開催。兼題、一つ・広場・未来・動く・ガイド・民族、各題二句(出席者に限る)。
▼第一回川上三太郎賞受賞者が柳都三月号で発表になった。川上三太郎賞(賞状・記念盃・副賞五百円)は岡山県の丸山弓削平氏の「茸山で茸をひかないのが親爺」など五句に、準作家賞は伊東静夢(尼崎市)定金冬二(富田林市)庄子喜一(仙台市)三氏が受賞になった。
▼故岸本水府句碑建立十五周年記念大会は五月三日(日)午前九時から岡山県久世町久世農協会館ホールで開催。
▼第一回北国川柳大会は五月三日午前十時から金沢市北陸放送会館MROホールで。
▼第六回さいたま川柳大会は五月三十一日(日)午前十一時から浦和市埼玉県労働会館二階ホールで開催。兼題、たまさか・再燃・が兼じがら・ロマンス・前触れ・バラバラ・抱える、が投句は五月二十日まで六

円切手二十五枚封入の上、浦和市常盤九丁目十四の六武藤かめ吉方「さいたま」川柳大会事務所宛▼第六回愛知川柳作家協会総会川柳大会は五月十七日(日)正午から東別院青少年会館で開催。兼題、おかめ・仲良し・風・さらさら・内証の上五月十日までに名古屋市中川区八幡町二の十一、加藤彩華宛。
▼川柳ジャーナル一九六九年度自選作品集の推薦結果が発表になり最優秀作品賞

疲労・倦怠感・神経痛

毎日のそう



は定金冬二氏が獲得、合計
点のトップは時実新子さん
と決まった。

▼木幡村雲氏逝去（番傘同
人）昨年四月六日喜寿祝賀
句碑建立記念句会を開催さ
れたが、四月八日朝逝去、
生野区の自宅で九日葬儀、
白柳氏が参列した。

▼一九七〇年版国鉄川柳句
集作品が募集されている。
応募要項は全国鉄川柳人連
盟事務局へお問合せのこ
と。締切りは五月三十一日

▼第十四回国鉄川柳全国大
会は七月四日午前九時から
五日十二時まで、兵庫県赤
穂市御崎で開催、兼題、着
物（奥田白虎選）進歩（伊
藤勢火選）食いだおれ（阿
万万の選）調和（梶川蘇堂
選）遺跡（浜田久米雄選）
投句は六月末日まで。

▼北川春果氏（枚方同人）
は三月三十一日から四月五
日まで福岡での内科学会・
伝染病学会、並びに全国都
市立伝染病院院長会に出張。

新同人紹介

増田次章

一幸・葵水・白柳推薦

▼菊澤小松園氏（大阪市同
人）は四月六日頃から急に
声が出難くなり診察の結果
は声帯附近が腫れていると
のこと、句会も全部休んで
療しておられるが回復まで
お数がかかる由、ご快癒を
お祈り申し上げます。

▼藤井明朗氏（島根県）は
一月二十七日木次ライオン
ズクラブから川柳二十一年
のむらくも川柳会の世話が
高く認められ褒賞を受けら
れた。「褒賞をされ思い出
につき当り」

▼越智一水氏（今治市同人）
は三月下旬、親子連れでと
もに愛好する古美術観賞に
大和路を訪ねた帰途、生駒
の霞乃先生を訪問された。

▼八木摩天郎氏（堺市同人）
は三月二十九日午後二時か
ら堺市中百舌鳥公民館で
「堺の古い話」をされたが
百舌鳥老人会の会員、幹部
連に川柳の作り方を話すべ
く約束された。

▼本田恵二朗氏（倉敷市同
人）は四月五日出発して結
婚式に参列のため上京され
たが、特急券を手に入れる
のが大変で、万博をうらみ
ますよと。

▼高橋操子さん（岸和田市
同人）は三月二十二日から
三日間、空路、鹿児島、奄
美、沖えらぶ島を巡廻、桜
島の一面の雪に驚かれた。

また、二十九日、三十日の
両日は鳥取へ飛び、早春の
山陰を楽しまれた。

▼川岡雪眼子氏（諫早市同
人）は福岡に嫁いだ令嬢の
初孫動子ちゃんを里帰りに
目を細めておられる。六十
才で五カ月の初孫。

▼高杉力氏（八尾市）は大
阪市立大学の商学部をめど
たく合格、父親の鬼遊氏
（八尾市同人）は自分の合
格ほどに興奮、四月の本社
句会で柳人から祝福を受け
ておられた。

▼伊沢青葉著句集「ともし
火」が二月十一日東京都世
田谷区上馬一の二〇の二か
ら発行になった。B6型百
頁、定価五百円。跋で片柳
哲郎氏は「川柳という文学
の興味性を語るまに、そ
して川柳作品の好拙を云々
する以前に、僕はただ素直
にその作品を見ていてあ

げたたいある大切なものの姿
を思うのである。一中路
へ何故創作し続けねばなら
なかつたかという最も大切
な、最も純粋なものが僕の
胸をうつのである」と書い
ておられる。
あすもひとり重いむかし
を両の手に
花の散るごとく静かにぬ
いでゆく
山村祐氏編集の「短詩」
が四十三号をもって休刊す
ることになった。一応短詩
運動の序章が終ったと述べ
ておられるが、大変なご苦
労だったと思う。
がスモン病と戦っておられ

る。ガン張ってください。
▼岡山県下川柳塔同人懇談
会の会場変更。五月三日、
岡山駅前「岡鉄くろぶ」。
▼岡鉄川柳会が四月から
「川柳後楽吟社」と改名。
▼太田湖平氏（福岡県同人）
は一月十四日に死去さ
れたことが、ご子息からの
通知で判明。謹悼。
▼山田季賛氏（高槻同人）
犬山市の大泉神社と小牧市
の田泉神社へおみやげの
写真が夢いっばいである。
▼川端柳風氏（東京都・本
名近常篤行）は、世田谷ヤ
クルト販売株式会社の副社
長に就任され、古川柳論講
執筆で大多忙とのこと。

楽しいお買物の夢をおくる 松坂屋の商品券

上野・銀座・静岡・名古屋・大阪の各店
横浜「野沢屋」・および徳島「サカエヤ」
で共通にご使用いただけます ■ 2階
500円券から30,000円券まで8種類

大阪天満橋



松坂屋

電(06)942-2201

本社 四月句会

会場 以和貴荘
六日 午後六時

花にはすこし早く会場の出足は上々。他社の好作家が毎月ご出席くださるので、変わった句風に接する機会が多くなった。

橘高薫風氏は、きやう五十周年記念に出席され、東京から本社句会へと直行、柳話の時間に駆けつけるというスケジュールである。

柳話は、路郎先生の教訓を中心に、生命ある句への作句態度として、友人の句集から、これを今日書き残さねば明日は死ぬかも知れないという心境で「句を作れ」と叫ぶ。

四月の月間賞杯は葛城伊三郎氏に輝く。

(河井庸佑整理)

出席―与呂志・吉太郎・花梢・八郎・柳宏子・双楽・新之助・庸佑・一三夫・一舟・作二郎・天笑・水客・柳志・凡九郎・薫風・好郎・大吉・千万子・形水・滋雀・摩天郎・万の・勝春・いさむ・冬二・圭井堂・鶴声・野迷路・静馬・言也・誓二・つき子・儀一・維久子・藻介・夢成・肖二・綾女・栞・静歩・一二三・修史・白柳・金三・トメ子・奈々・

葛城・眉水・生々庵・頂留子・弥生・鬼遊・柳太・史好・一治・凡吉(前月は章)・楨三・恵美子・酔々・季賛・宣介・具里院・葉子。

席題「良縁」 福浦 勝晴選

良縁がまたむこうから外れて来
両親と住む良縁が気に入らず
良縁に男たるもの騒がない
良縁と言わねば祝詞にもならず
神主のお世辞良縁ばかりです
良縁であるなら母さん嫁きなさい
挨拶は皆御良縁お目出とう
良縁とは勝手に仲間さんの口
親だけが乗る気になっている良縁
良縁と相手の方は思っています
良縁だという父もきらい母もきらい
良縁とコンピュータに頼む現代っ子
仲間らのきまり文句は皆良縁
良縁と言われた夫のたよりなさ
良縁だよと甘酒をすすめられ
ハイミスの瞳に良縁の紅がなし
良縁を祝してくれる眼と出合い
良縁をみんな逃がして才女老い
良縁と思うた妻に飼育され
良縁を蹴って悪女に未練あり
良縁を待てぬ女の爪を剪る
良縁を捨てて赤旗振り回し
良縁ということにして荷を飾り
仲人のいう良縁は揃いすぎ

柳志 鬼遊 眉水 静馬 酔々 鬼遊 野迷路 万的 万の つき子 柳宏子 恵美子 頂留子 双楽 葛城 恵美子 静歩 藻介 一三夫 儀一 天笑 作二郎 圭井堂 花梢 好郎

良縁にしても淋しい親ごころ
良縁と月並ながらはめておき
ご良縁もう聞き飽きた電話口
良縁を蹴って悪女の果を温め
良縁がちよいちよい里へ泣きにくる
良縁とすすめた人をうらむまい
良縁を思えばこそその労をとる
家裁の窓口良縁がここかしこ
良縁も得ずBGとして老いて
良縁と天眼鏡がいうてくれ
親せきをみんな集めた良い話
良縁のこれから先を祈る母
良縁で私の自由をごま化す気
席題「ため息」 定金 冬二選

ため息をついて学校から帰りと
ため息のしずくかダイヤさんぜんと
ため息を上手に使い金を借り
ち息派手にムードをうたう歌手の指
月給袋またため息が配られる
ため息を噛みしめ妻の義務終わる
タミナルため息ついて消えていく
笑い過ぎたため息ついてはる
ため息は自分を知らぬこころ音
白いたため息臨床のメスうごく
ため息が嫉妬に変わる美しさ
大根の値段に息がつまりそう
金庫からため息が出る金詰まり
ため息が聞こえるように牡丹散る

与呂志 頂留子 葛城 万的 一二三 楨三 維久子 天笑 凡九郎 一三夫 柳志 圭井堂 勝晴 野迷路

乗車券キセル乗車と知らなんだ凡九郎
銀婚の切符は子供がとつてくれ万の
腰やつと決めたか定期券を買い一三
乗車券夜明けの富士が美しい静歩
乗車券小人用が氣に召さず一舟
乗車券罪の重さとなる人か冬二
乗車券中折帽へ置き忘れ葛城
乗車券都落ちする日が捺され水城
氣まぐれに鈍行で行く乗車券水客
乗車券まとめて買わんたくらみか酔々
乗車券一枚だけの乗車券醉々
続き番号二人で座る乗車券眉々
乗車券前のおつりのひまがいり白柳
改札で坊やが渡す乗車券生々
乗車券拝見足を組み直す水客
とにかく乗せませりなはれと乗車券凡九郎
ふるさとを二度と踏むまい乗車券一三夫
乗車券春のおんなの掌をこぼれ冬二
乗車券の指から逃げて行つた町作二郎
女の手のぬくみともらう乗車券恵美子
検札へ邪魔くさそうに乗車券肖一
日定のない旅に出る乗車券形水
てのひらの特急券は火薬だぞ冬一
検札へ親子三人分を見せ言中
乗車券つけて採用通知来る天竺
乗車券機械で買うて乗り遅れ庸佑
万博の人に押される乗車券藻介

兼題「望遠鏡」 本多 柳志選

色紙短冊
書画用品

大坂戎士布

丹青堂

[illegible]

望遠鏡出せばカーテンもうしまり 天笑
 アベックのささやきをきく望遠鏡 花梢
 望遠鏡のぞく背中に欲がなし 惠美子
 望遠鏡思わぬ視野へ出た叫び 滋雀
 退屈は望遠鏡をさかさに見 柳太
 馬を追うレンズに欲が凝集する 新之助
 アベックへ望遠鏡をうばいかけ 花梢
 望遠鏡へ孤独な星が語りかけ 一二三
 アベックの芝生をねらう望遠鏡 弥生
 望遠鏡ブライバシーを見てしまい 言也
 望遠鏡宇宙の嘘を持って余まし 水客
 望遠鏡子供頃の顔になり 一舟
 月蝕へ雲が邪魔する望遠鏡 好郎
 幸せな声がかこんだ望遠鏡 水客
 望遠鏡トップの我が子追いつけ 千万子
 けつたいな物を見付けた望遠鏡 葛城
 望遠鏡そんな遠くを見ておらず 静馬
 望遠鏡良心があらぬのぞかれず 千万子
 理科系へ行かすつもの望遠鏡 積三
 猫柳望遠鏡の視野の中 静歩
 望遠鏡で覗かれても月は動かない 八郎
 名優のホクロ見つけた望遠鏡 勝晴
 スピードは望遠鏡をあわてさせ 吉太郎
 望遠鏡ガイドは霧を詫びている 静馬
 望遠鏡いつも磨いている平和 夢成
 望遠鏡の中へ選手の汗が落ち 柳志

兼題「バジャマ」

大坂 形水選

寝るだけのバジャマの柄が気に入る 扇水

更年期妻L寸のバジャマ着る 美代
 バジャマから寝姿わるい娘に育ち 芳子
 六十になってバジャマを着せられて 正朗
 ホームバーバジャマの妻もグラス 軒太
 バジャマで見るテレビの事も言い 万佑
 ねとぼけたバジャマ便所をもちがえ 庸伯
 バジャマ派手せめて世の憂き忘れ 一三夫
 囚人の行動半径バジャマ着る 鬼遊
 バジャマでも会う気安さグラス乾す 滋雀
 バジャマ着て物価は何も知らぬ顔 静歩
 試歩に出る廊下のバジャマ見栄が 生々庵
 派手すぎるバジャマを購て妻の意味 積三
 羞かしいバジャマの柄を着せられる 鬼遊
 早朝の客はバジャマであしらわれ 千万子
 アパートの昼をうろうろするバジャマ 藻介
 マンションに住むバジャマも派手 静馬
 バジャマの膝にみごとなベルシヤ猫 惠美子
 バジャマの朝で窓の女を探そうか 作二郎
 朱のバジャマ過去を喋り始めたぞ 夢成
 このバジャマ穢れた四肢は包まない 眉水
 バジャマ着ぬ子を追いかけてニヤロー 惠美子
 バジャマを脱いで朝の女が生まれる 作二郎
 ちぐはぐなバジャマで寝かす子沢山 弥生
 別宅で若手のバジャマ着せられる 静馬
 バジャマ着ても仕事を追う電話 一三夫
 一辺に起きたためしはないバジャマ 藻介
 春のバジャマ女の嘘は知っている 冬二
 トランクの底人妻となるバジャマ 花梢

新しいバジャマ夫は気がつかず 柳志
 ダブルベッドへ腰かけてバジャマ 白柳
 夫婦バジャマを夫婦の形で脱ぐ 冬二
 二階から花のバジャマが降りて来る 作二郎
 バジャマ着ると女逆立ちしたくなる 形水

兼題「艶」

八木摩太郎選

艶のよさイミテーションとは気 軒太
 今日だけは色艶つけてほしいとこ 藤持
 仏壇を磨いて祖母の愚痴つづく 正朗
 惚れ惚れとする顔の艶肌の艶 祥月
 艶のある声へ婦人の票は逃げ 扇水
 色艶が消えて酒場の灯になじみ 一二三
 おとなりの通りに茶碗の艶を賞め 静馬
 顔の艶よくない方が見舞客 虎声
 喪服よりにはじむ女の妖艶さ 酔々
 愛着を手垢に艶のあるパイプ 滋雀
 参詣者なでるで艶たオヒンヅル 双楽
 未亡人髪は艶まで勘ぐられ 柳志
 男より女がほめる艶っぽさ 形水
 へそくりのコツも覚えて艶話 静歩
 寡婦となり当座は艶のない暮し 一治
 汚されにラッッシュへ急ぐ靴の艶 勝晴
 浅漬けのなすびの艶も母のこつ 葛城
 顔の艶はめて女を意識する 与呂志
 天平の優雅をしのぶ壺の艶 一三夫
 艶消しな話になって宴はてる 新之助
 椿落つ尼僧が語る艶ばなし 鬼遊
 大抵のことはして来た顔の艶 藻介

高いのは艶がちがうと並べて見
余裕ある生活に見える顔の艶
艶っぽいマダムのウインク客を寄せ
女のコ意識している艶話 柳宏子
艶っぽい話へ鈍子追加する 一三夫
御齡判り兼ねます顔の艶 八郎
顔の艶はめられ高い方を買いつき子
色つやの褪せた老妻口達者 千乃子
銭単箇先代さまの色艶 柳太
艶のない肌にな女の乱れ知る 与呂志
吉祥天宝珠に天平の艶を秘め 生々庵
艶っぽい声の電話を妻が妬め 儀一
パトロンを変えてマダムのかおの艶 柳志
艶っぽい指で請求書が届き 天笑

ソロバンに艶に老舗の浮き沈み 花梢
宗右エ門町艶歌は遠しクラクション 鬼遊
銀いふし艶はいよいよお人柄 生々庵
艶消しの人生という茶がうまし 水客
つやつぱい目でもらまれてふるき来 天笑
妻の留守骨董ものにも艶を出し 摩天郎
兼題「新語」 川村 好郎選
ハイジャックなどと新語の物騒な 酔々
意味のない新語が意味を生む世代 虎声
発音のちがう新語で母達者 水客
新用語嵌めても中身変らない 形水
年よりに味も素っ気もない新語 眉水
新語をば知った振りして恥をかき トメ子
新語どころか旧かなも知らない娘 白柳

雅号ぶっちゃけばなし(75)

よねいち



ふなき

舟木 与根一

昭和二十一年秋頃、松江市役所の若
グループで「新伸」という機関紙を發行
勝手な落書をして自己満足していた頃、その
紙上へ川柳と称し、狂句まがいを載せて得意
になっていた。たまたま市職員で先輩だった
山川児氏に見つかり一喝を喰ったのが川柳に
凝りだすきっかけだった。以来二十有余年、
未だに極意はとれない。本名の米市(よねい
ち)で六年程過ぎた昭和二十七年十二月五日
目に入れても痛くない長女が五才でポツクリ
逝った。

不運を姓名学のせいにして替えたのが与根
一。本名は座頭のように厭だが、呼び方は同
じでも字に書けば大違い、今では門札、其の
他公文書以外は殆んど与根一を使用している
地方公務員(四十六歳)

美しい言葉の新語かきまわし 一三夫
マスコミが産んでけなしている新語 滋雀
戸迷いのままの新語を聞いている 作二郎
母さんがこっそり辞典引く新語 花梢
何語とも言えぬ新語にある魅力 柳宏子
抜け目新語で売込むコマーシャル 静馬
やつと覚えた頃は新語が逃げてゆき 生々庵
PTA母は新語を聞きかじり 摩天郎
次々と新語へ老は追いつけず 言也
新語だけ知って思想のない談話、 鬼遊
ハイジャック一週間ではやらせる 与呂志
覚えたての新語で孫におちよくられ 静馬
またしても新語にまける父である 冬二
叱ってる親を新語で笑わせる 花梢
父と子の対話こわしくくる新語 冬二
あやふやな新語で話ませ返し 儀一
男が吐く新語にだまされまいとする 惠美子
日本語で言えと新語を知っていず 鬼遊
初孫の片言我が家の新語なり 葛城
ママさんの気転新語も心得て 好郎

橋本緑雨氏逝去

「川柳雑誌」時代は「洞友」として
活躍されていたが「川柳塔」になって
からは病氣勝ちだった。(七十八歳)
四月十五日逝去、十六日の自宅での葬
儀には生々庵主幹ほか幹部が参列した

老地物壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

積み上げたままの姿で売れ残り
裏切りが出てから味方の面白い事
雪積んだ貨車から童話降りて来る
ジレンマに落ちて煙草をねじ曲げる
臆病な子でお菓をいやがらず
円満な家庭風呂にも順はなし
口角泡を飛ばしてジレンマを訴える
嫁自慢してたら嫁もほめてくれ
決断へ妻のジレンマ邪魔になり
円満な顔で効き目のない小言
我執捨てやっつとジレンマ飛び越える
愛終る積木崩れる音を聞く
労組も味方になって立直り
する事が臆病になる病み上り
臆病とわろてるやつがひっかかり
円満を望み阿呆になっておく
積みあげた努力の末にある空虚
箱庭のような庭にも四季があり
円満な時は仲人忘れられ

好いき 凡九郎 形水 金三 新之助 肖二 好郎 君子 儀一 白柳 喜風 文秋 作二郎 柳宏子 滋雀

受付で早や円満な社とわかる
味方から騙してかかる逆スパイ
去るものは追わずに居たら誰も居ず
落葉舞う音に憶病歩を早め
臆病のくせに夜遊びする娘
すぐ妻が味方に廻る母で無事
宿望の庭箱庭で終りそう
ゆうゆうと三毛箱庭で用を足し
顔だけは円満妬心ゆきき
円満に育てと里から雛人形
男一匹酒が味方のからつ風
臆病の因は小金であるらしい

綾女 響二 小松園 鶴声 双楽 千代 静水 章雅 八郎 柳宏子 柳志 滋雀 金三 好郎 千梢 新之助 凡九郎 白柳 一二三 作二 鶴声 誓二 綾女 智子 肖二 醉々

けちんばも孫のえくぼにみやげ買
修正の手に持ち味を殺される
出世のためのふみ台有名校に入れ
世間並と云う暮しにもまだ遠く
手応えのない薄馬鹿を可愛いがり
すべり台親もすべって見たくなり
世間に背向けてひっそり過去と居る
へんくつの持ち味死んでからわかり
持ち味を食べ別けさせるにぎり寿司
手応えがメモ丸まったまま戻り
玉造川柳会(大阪市) 西出一栄報
なべやきの言葉少なに老夫婦
ジョッピングへ客ぶちあけてバス婦
ジョッピング何処の誰かが着る衣裳
ショッピング長い時間の珈琲飲む
期待した愛児は交通事故で死に
育て方一つコーチの貴重し
子育てに追われて妻の味気なし
偉人伝ややり違うてた育て方
施設から育ち猛練習にへこたれず
それぞれの夢を育てる卒業証
背を流すスタイルへ育つ子の力
記念樹の育ちに歳を笑い合い
俺達の子だ望むまい望むまい
姑の口を封じてる 育児法
育てられて育てて歩む 人見譜
遺児育てて生くる重みのドレス着る
針金の曲った儘に育つ 松
雛壇を降りて人形遊びたし
人形が着てるから柄素晴らしい
故郷の歴史も秘めて流しびな

大吉 形水 君子 文秋 儀一 好一 千代 静馬 章雅 水 栄二 肖二 太庸 凡九郎 作二郎 竹青 宏佳 誓二 清人 やなぎ 葵水 鬼遊 弘生 好雅 葵一 鶴声 育園 正朗 芳子

叱られた言葉で人形叱られる
 微笑んで人形俵を信じきる
 赫土の中に動かす埴輪無事
 やりくりを棚の人形に見下ろされ
 囲まれて花嫁人形眼を伏せる
 一人ツ子両手に人形かかえて来
 マルクス主義人形の家に見えてくる
 ただ夫を信じ頼って半世紀
 ばろくそに云いつつ夫の無事折る
 妻の歯がかみ切れぬ肉ひきうける
 何も云わぬ妻が一番恐かった
 柳宏子

鶴声
 一舟
 六龍子
 金三
 弘生
 静馬
 あいき
 儀一
 風仙洞
 鬼遊
 柳宏子
 作二朗
 正郎
 育園
 誓二
 文秋
 芳子
 凡九郎

下請へ外人さんが来て慌て
 うなずいて納得ゆかぬ瞳が青い
 掘りゴツツ気に入り外人長居する
 体臭に馴れて外人気にならず
 デパートはもう本番の春かざり
 雛人形松屋町筋春を呼ぶ
 冬物一掃こんな処にのぞく春
 春はまだ来ずモンタージュ掇せて
 すき焼に水餅も入れ早春譜
 川柳たましま 水粉 千翁報

智子
 はじめ
 綾女
 白柳
 好一
 肖二
 古方
 虎城
 雅

そろばんをはじき社務所も寝ると
 鑑戸を心に降ろし思慕を絶つ
 裏木戸を開けておきます友がで
 初詣でまた神国に戻りそう
 住み馴れて左遷の島に情が出来
 島一とつ島でなくなる新予算
 戸じまりのない国はない自衛隊
 生きている今日を祝う車椅子
 閉めた戸が逆戻りして意志表示
 日本も島だと島の子が笑う
 麗水 秀魁 簡子 安静 郁恵 幹定

楳元紋太先生逝去

(ふあうすと川柳社)

かねて静養中の楳元紋太先生は四月十二
 日午前一時三十分に脳軟化症で八十一歳の自
 宅で葬儀をされたが、川柳葬は五月五日午

後二時から四時まで阪急電車「春日野道
 駅」北の高法寺において行われます。一謹
 んでお悼み申しあげます。

川柳塔社

野心あり来賓席をたしかめる
 神主の部屋に算盤置いてあり
 来賓の方が立ったり坐ったり
 大臣を今日の社説が叱りつけ
 不渡りへ自動ドアの音もなく
 誘致するプランへ鳥が呼吸する
 野ざらしの歴史を秘めて鳥眠る
 社会鍋音はこころとして戻り
 来賓が笑い一座も皆笑い
 罪深き指を洗って神話聞く
 愛満つるこの倅せの戸を開ける
 社の秘密もれるマスクをかけた人
 合格の祝辞が靴屋から届き
 南風冷えた心の戸を叩く
 備前川柳社 目賀芳月報

澄子
 平子
 慶子
 朝二
 三林坊
 秀子
 敷草
 千翁
 三幸堂
 林鶴
 克枝
 里風
 扇水
 隆三
 柳子
 芳月
 宗義
 芳明
 鮫虎狼

即製の旗は半紙をつぎ合わせ
ひいき目でなくとも日の丸美くしい
憎み合う国が並んだ万国旗
旗色がだんだん悪うなる落日
ミニスカートが持つ横断旗目立ち
国体旗持つて人も酔うている
沖繩に日の丸の旗かえって来
寄せ書きの日の丸ふとんにして座り
旗の下成人式の娘を写し
白旗が頭を垂れたように見え
ポロポロの旗置いてある記念館
楽しさが透ける新居の灯がともり
末っ子が十五うし楽になり
ひと筋の道へ夫婦でする苦勞
工事場の監督楽なように見え
楽々と背伸びをさせる湯の香り
楽な世にすると候補者みんな言い
地球から月へ放した宇宙船
恩給を片手に稼ぐ楽隠居

南国へ帰ったツバメの巣が乾き
桂浜一人の旅の貝拾い
南国へ来て密月は汗をふき
銀婚になっても養子とまだ言われ
銀婚に峠も岸もただ見え
銀婚の旅老妻もガムをかみ
おいと呼ぶだけで銀婚煙が出来
夕映えに銀婚の影どこまでも
南国で妻にはすめ夜が更ける
南国のみやげこたつで取りまかれ

伊久野
秋月
胡風
浄美
清春
正州
柳五郎
胡風
宗郎
浄美
清春
芳明
幸仙

銀婚は生きる限りを誓い合い
銀婚の友を四方から写し
銀婚が来てほんとうの年を言い
貯金おろしてねらわれていそうなり
年金の額をひっこく子等がきく
銀婚ですかと未亡人にうらまれ
銀行で金の匂いを嗅いで来る
ありあまる金にお世辞がつきまとい
銀婚の旅で苦勞を湯で流し
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報
残業の顔で湯ぎめの妻と坐し
パチンコに勝ち過ぎた湯ぎめ
犬よりも劣ると思義からませる
日曜日犬も朝食ぬきにさせ
叱られて子供は味方に犬を抱き
立話湯ぎめのくしゃみでけりがつき
湯ぎめする妻に晩酌ほつとかれ
飲み仲間湯ぎめをしに飲み直し
帰路のバス湯ぎめ酔いさめ詰め込
犬の子もきりよう良しから貰われる
遠吠えに我が家の犬も起きた音
招かざる客拾った犬が追い払い
湯ぎめせぬ心遣いか卵酒
盲導犬ある日恋を知りはじめ

鍋ン坊
芳月
伊久野
万子
柳子
秋月
宗義
水仙
好郎報

どぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報
団体の背中合せで酒を注ぎ
団体の旅の夫婦は他人めき
団体が堅すぎ欲求不満です
団体の四五人スリッパ無いまま
一人の足下手団体パス待たせ
団体にまじり異端を意識する

大古
痴亭
河産
雄峯
文史
修史

旅行・宴会・リクリエーションの
ことならどんなことでもご相談くだ
さい。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18
三洋電機株式会社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

団体がまだ喋ってる午前二時
旅慣れた頃は団体世話さされ
忘れたい場所へ団体つれてゆき
信用をされた秘密だ喋るまい
共通の秘密が二人を近づける
仲人は秘密に触れずまとめとき
団体に社長うしろへついてくる
団体の疲れた顔が揃う宿
団体の旅でも妻は出し渋り
団体の歌に音痴もはげまされ
ワッハッハと笑ってすまず秘密持ち

草春
喜風
孝子
奈々
虎声
儀一
静男
比呂路
生長
太治
東天紅

へそくりが出来て女房にあるゆとり口止めをすれば秘密がこぼれそう特売場どさくさ客へ目が光りどさくさをしおに二人は座をはずし指で輪をして押んではつたん何のミ団体に馴れたのと居て旅たのし

あすなる川柳会

飾るから人の善意に遠くいる内幕は知らんが急に式を挙げ気まずさに急ぐ用事を思い出し急ぐから地下鉄でゆけよと係長早春の陽射しへ一刻の風通し風通しよいはず裏は日本海猫出入りするだけ障子開けてある

まるべに・あすなる句会

養老院自慢話で今日も暮れ何かある打って変った慰懣さ初詣帰りの無事を先ず頼み初詣で今年も同じ願をかけお正月教育テレビもかけてみる万博の宿をたのむと年賀状中卒は貴賓の如く迎えられ着くずれが直せず晴着立ったまま落魄の自慢話へ酌いでやり

南大阪川柳会

句会
往來
時 五月二十一日(木) 午後六時
題 調和・解ける・後手・庭
所 松崎町二丁目 以和貴荘

重夫 鬼遊 双葉 好郎 小松園 白柳
好郎 恵美子 青香 慶之助 百酒 ゆきを 素郎 茂里 節子 一世 幸子 星斗 瓢太 泉睦 立児

大びらに朝から酔わす初春を酌ぎ善い事で来た警察でよく笑ひあやふやな儘その通り伝えときバババババ三カ日つきまとい偽りなき古里の雪を聴く課長さん今夜は自腹か釣銭も取り

オーエスケ川柳会

ひとりもスード見た夜のわびしきか婚期すぎ家族と近所に気を使い売り上げは計画通りいかぬもの崩れてもこれでも立て我がプランプランだと百万円もすぐ貯る集金の車の音で電気消す寮を出て行先決める一人者独身の最後の夜にやっともて計画は節酒節煙マイホーム独身の部屋カーテンが下りたまま年金増額プラン大根二本分独身がなんぼえかとのろけられ計画は明治のグチで足踏みし振り向けば壁に我が影あるばかり

むらくも川柳会

寒風が別居の心をふきぬけるほろ酔いの気げん寒風追いつないどの背も丸く寒風追いつない寒風が夜廻りの声張りあげる寒風が激し道ゆく人もなし寒風を笑って咲いてる黄水仙寒風が去って草履をゆるくはき寒風へ残業終えた夜の温み会計の現金みんな人のもの現金の奴と笑われても儲けあとすべて頼むと現金握らせる現金があつて奥さんよく喋り利がなきと見れば現金ソツボむく和歌山短詩型文学クラブ 中筋三幸報切実な話まさかであしらわれ子の貯金まさかの時に一寸借り天国のパパには翼あるかしら銀翼小さくなる若き恋のせて看護服脱げば女の胸となり胸中を打ち明け壁が打ち破れ母訪うてふところからっぽに帰り胸襟を開き足元掬われる税吏からつばさで逃げた夢の中遠い日の恋人つばさもっていた

寒風へ唸り上げて風の意気通児
ご詠歌の列へ寒風なぐりこみ

玉造川柳会

時 五月十一日(月) 午後六時
題 人気・和服・特別宿題
所 玉造交差点南一〇〇米 大阪信用金庫

南海川柳会

時 五月二十一日(木) 午後六時
題 「レンタカー」「息ぎれ」「意地」
所 ナンバ高架下 親和クラブ

コンピュターまさかと思う赤字出す
時効までたった三日が仇となり
まさかとは思ふが相手確かめる
まさかと思ふアイデアが生かされる
まさかとは口先野次馬信じてる
うたがえば切りなし夫婦愛つづく
義兄逝く思えばまさか彼医博
神様もまさかと思ふ知能犯
手配するまさかと思ふ人の名で
まさかの時やはりお金が物を言い
ラブレター半分もかけぬ胸の中
いやな客はめて帰せし胸の中
○

助太刀の妻に商談こわされる
哀願の目をうけとめて助言する
助太刀が来てご本尊雲がくれ
きき耳をたてれば寝言もう終り
寝言の子のぞけば出て手が冷い
団体の朝食寝言で花が咲き
意見聞くひざに落書指で書き
落書の紙飛行機に折り飛ばす
黒板の落書うまいなど教師
助太刀で道化役者となる焦り
助太刀のプラスチックの美しき
こうなれば助太刀に入る余地も無し
すね者の落書きならん世に残り
らくがきに達筆はなし一笑す
落書もされて人気が出るスター
芸が身を助ける仲に助けられ
言訳の出来ぬ寝言を妻が衡く
ワイロー社(ハワイ)

火打石穢れを払う塩をまく
初夢の縁起かついで苦勞する
元旦の縁起初詣から始め
遠磨の眼二つ揃えた得意顔
茶柱へ縁起がよいと勇む朝
何となく昇ぐ縁起も親ゆずり
縁起でもない事言つて座が白け
お仲人縁起よい日を独りきめ
吉日にこだわりの機を返し
玉串へ縁起を托し鈴を振り
飲めぬ口縁起云われて一つ受け
縁起など明治の匂い遠くなり
塩まけばそれで気のする祖母だった
縁起など気にせぬ性で母若い
こまつ柳壇 山上千太郎報

河舟
紅溪
曉舟
快夢起
泉水
カロ女
拝山
雪海
北雪
三里
浮草
峯円
崖花麗
雄
良行
魚山
一進
やすえ
駿一
とし樹
ミワ
路也
詩目江
芳子
信子
たつ路
生風
吉枝
進学へいつか桃咲き桜咲き
進学へ親の思想まともならず
父親の遺影へ進学決意する
進学はよせよせ家業の大工やれ
進学をするから自家用買えという
進学へ法華の太鼓遠慮せず
東の間の青空子等の叫びごえ
青空を見上げて洗濯ひとかかえ
床上げの眼にしみじみと空青し
故里はいいなきれいな空の青
窓越しに挨拶してるよい日和り
言うことなし青空に寿司ひろげ
青空へ団地は干して干しまくり
ガラス越し父の涙も溢れてる
悔のない一日コップ酒溢れ
万博へ溢れる意欲国あげて
開通へ喜びひとしお過疎の村
開通のテープはいとも軽く切れ
歩道橋に黒棒写真も渡り初め
千太郎
柳塔松江支部 祥月報

悪い日は仏滅とかきらず隙ある日
お月様の恥部をアポロがまさぐった
七色の虹が誘いに来る夢路
彼女と二人だからよいマナー
卒直を愛し枕木無言を愛し
心も日本晴れ春がくる春がくる
川柳かざみ 池田古心報

シャッターへ孫の重さを抱いて立ち
勿体ない八畳二間が空いていて
ピアノ弾く子の指先へ春の音
貧しさの家に振袖とどけられ
頑張りしわが目立つ同窓会
鼠にも髭有りまして俺は人間さ
何見ても涙出さねど墳輪の瞳
過信した愚かさ友も敵と知り
御隠居の日課に花壇美しい
不用意の発言つるしあげをくい
泣く用意して税務署へ出頭し
迷惑な顔へ保証が言い出せず
保証印押して小言も添えて置く
親切の保証へ信用くずさぬ気
一か八か長考一番銀を打ち
考えたあけくおみくじ引いてきめ
人の渦盲導犬を頼り過ぎ
ヘルメット過信の親を悲しませ
母印押して美しい結論にする
駒つなぎ 岸南柳報

もうどっちでもいい産声待つ廊下
魚屋の声に鰯も生きてくる
声の出ぬまま嬉れしさをかみしめる
消えやらぬ恋をまぎらす酒の酔

良平
順三
小路
詳恵

親しさは妻にも云えぬ事明し
新入りに親の慈悲説き我を見る
ふるさとは昔の朝のあるところ
永住の気持へひどい排気ガス
いじわるな雨が旅情を感じさせ
よおもま倦きもせで来た顔と顔
幼稚園どの顔見ても親泣かせ
沈丁花咲く頃祖国に還り来し
五時間も並ぶ阿呆は月の石
仲裁の花を持たせる花がない
浪費癖エクボはそんな娘に見えず
城北明朗会 川口弘生報

男なら売られたケンカ買ってやり
男前は散髪をしたその日だけ
足のしびれあぐらの男うらやまれ
ミニスカートの脛が気になる男の目
腕組みで男の姿出来上り
損得を男の意地が忘れさせ
二人目も男の子又かとは云わず
控え目に食べた男が勘定し
獣性を時にひらめかす男
ごぶさたもヤアヤアで済む男同士
つり銭をもらい忘れるのも男
明治男古い頭が役に立ち
負けぬ気の女房恐妻家を育て
生活を見たさに万博ダシに来る
満足そう仕事着ままのコップ酒
親光パス呟声高く帰って来
友逝きて悲しく指折る百カ日
落ち椿拾うて孫のみやげにし
はめられてあげる楽しさ花作り

南柳
規一郎
宏子
育園
柳信
河太郎
悟郎
潔郎
はや
美代
白柳

★
前号P46 家光を叱って彦左名を残しは
輝親P47 二切れのパンでパパさん追い出さ
れは伶人と訂正。
欲ばるな六文あれば行ける国自然
年度末予算があまりあわてさせ
殉職の上衣から出た子の手紙
電話でも言えず手紙も筆不精
かたみ分け欲が火花を散らしあい
七転八起を説いて父の筆
転動へ身重の妻をおいてたち
転動で社内の恋が岐路にたち
ふるりの便りで母の年かぞえ
南州

光好陽子報
山自然
山水
秋月
文月
法院
陽子
能子
葵丘
允香
南州

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般
合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 661 三四五二一四
夜間 661 四四〇八

西尾 葉句集

仮題「水鶏くいなの音」 近日発刊！

還暦の年に想を練り、川柳生活四十年を自祝し、あわせて恩師故麻生路郎先生に捧げる意図をもって、来る七月七日の路郎忌を期し発刊することになりました。俳句から川柳へ進み、元不朽洞会理事長として活躍眼鏡と髭に親しまれ、温厚酒脱の好作家として知られた西尾葉氏の処女句集に拍手をもってお迎えください

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社

本社五月句会

日時 五月六日(水) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

席題 柳 話
「ケ」 「話」
「満」 「好」
「切」 「員」
「礼」 「札」
三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円
★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

5月の兼題 「メニユー」 「鼻」
「失言」 「善意」

秀句鑑賞と梅志句集 送料とも 550円

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

―自選は四句以内―

集 近作柳構 (10句) 北川 春巢 選

九輪抄 (3句) 清水 白柳 選

課題吟 (各題5句以内)

募 「求人難」 中筋 三幸 選

「スピード」 辻 白溪子 選

「逆境」 西 いわを 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

―自選は四句以内―

集 近作柳構 (10句) 北川 春巢 選

九輪抄 (3句) 清水 白柳 選

課題吟 (各題5句以内)

「ライバル」 奥谷 弘朗 選

「退屈」 久家代仕男 選

「嘘」 大鶴 喜由 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

定価 百八十円(送料六円)

半年分 千 百 円 送料共
一年分 二千百六十円(送料負担)

昭和四十五年 四月二十五日印刷
昭和四十五年 五月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

〈朝鮮人蔘〉の効用



二千年以上

の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

「ヒヤク」は

この朝鮮人蔘の

有効成分をそっくり

カプセルにつめた

現代人の薬です



- 体力を充実させたい方
- 疲れがとれにくい方
- 貧血・冷え症の方
- 老化現象の方
- 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2-5

朝鮮人蔘エキス製剤

ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

・ペンペン草・

★二カ月前で遅刊したうえに、中の組がガタガタで、とくに前号の「九輪抄」は目もあてられない。印刷所の人手不足がこんな結果になってしまった一深謝。

★同人特集「男の句」は、女流作家三氏にお願いして女性から見た「男」をえぐっていただいた。

★前号から目次の両側に座右の句と自句を出すことにした。カッとも用意したが、まああわなかつた。なんだかゴテゴテしているようだが、当分はこのスタイルでいくつもりである。

★NHKの人気番組「ふるさとの歌まつり」について、石川県の野村味平氏から書信があった。あの歌まつりは路郎先生がNHKに提案されたものらしいとのことである。

★タイトルの文字は、路郎先生の筆ではないか——と味平氏は云う。
★文字といえは、神戸の書家、望月美佐女史からうかがった話だが、NHKから依頼されて、ドラマの題字「虹」を書くとき、虹というイメージを、

どうして文字にあらわそうかと苦心されたそうだが、天空にかかる七色の橋は、雄大と華麗、荘厳と幽玄などを頭にえがかれたのだろうか、さて、筆を白紙へ走らす段になって、虫へんであることに気づき、今までの虹のイメージがガタッと消えてしまったのだそう。

★虹をなせへんにしたのか、女史はそれをなげいていられた。十七音詩にも通じる話だが、川柳にわざとらしい難字を使うのはボクは好かない。

辞書をくらないと自分でも読めない文字なんて、東野大八先生の「活版印刷事始め」ではないが、おおよそ活版屋腔かせだとおもう。

★五月号は絶対月末発送——当分は信用挽回につとめる。このごろは主家のためにたらく人を「浪花節的」だといひ、ナマケル奴を現代的だと云うやりにくい。
★前月号の後記を休んだら「後記も百八十円のうらちだ」と叱かれた。ゴメンナサイ。

(不二田一三夫)

純良医薬 第一製薬

うちみ・肩こりに

ペタンと貼るだけ!

〈新型バップ剤〉

パテックス



● 140mm x 100mm 3枚入



タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 100-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・1%キー付き
16けた2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇 る	海 岸 美 を	風 光 明 媚 な
--------	------------------	-----------------------